諫早市文化財調査報告書　第１集

風観岳支石墓群調査報告書

諫早市教育委員会

諫早市文化財調査報告書　第１集

風観岳支石墓群調査報告書

諫早市教育委員会

序

昭和50年11月に実施された風観岳支石墓群の確認調査は３週間たらずの短期間ではございましたが、無事終了することができました。

風観岳鞍部一帯に散在している本遺跡は昭和45年九州横断高速自動車道の建設構想に伴なって、県教育委員会が大村湾東岸地区埋蔵文化財分布調査を実施した折に発見されたものであります。

周知の如く、支石墓は我国に於ては九州西北部に多く分布する特殊な墳墓で学術的にも非常に重要であるということから、その保存保護に努めてきましたが、一昨年その一部が損壊されていることを発見し、今回、国、県の指導を得て、緊急に確認調査を実施したものであります。本書はその調査報告書であり、郷土の歴史研究、教育に活用していただければ幸いです。発刊にあたり、調査を担当していただいた県教育委員会をはじめ、心よく御承諾いただいた土地所有者関係各位に厚く御礼申し上げます。

昭和51年３月31日

諫早市教育長　金　森　　遠

凡　例

1．本書は風観岳支石墓群の基数確認と保護策策定のため、昭和50年度国庫補助事業として行った調査報告書である。

2．調査期日

昭和50年11月5日(水)～11月23日(日)

3．調査は長崎県文化課にお願いした。

調査員　正林　護、田川　肇、副島和明

4．調査協力者

大村市教育委員会、古賀　力、古賀佐徳（文化財保護指導員）、栄田広海（破篭井町町内会長）、前原正平（下大渡野町町内会長）、藤田秋義、岸　村夫、中島正一、富田清二、山口要蔵、藤田敏幸、平原安馬、村崎昭雄、清水　勝、荒木幸典、岸伸太郎、荒木作義、荒木定市（土地所有者）。

5．地形図および支石墓配置図の作成については市耕地課にお願いした。

6．本書に収録した石器、土器の縮尺は下記のとおりである。

石器　実測図　2/3　写真　2/3

土器　実測図　1/2　写真　2/3

7．出土遺物および採集遺物はすべて県文化課に保管してある。

8．支石墓の番号は、確実なものおよび確実性が強いものは第1号～第20号まで、不明確であるが要注意のものについては混乱をさけるため100番台の番号を附した。

9．撑石の重量については、玄武岩の比重を2.87として計算した。

10．本報告書作成にあたり溝口美津代、望月恭子、山口恒子各嬢の協力を得た。

11．本書の執筆は、1（正林）、2（田川）、3（副島）、4（田川、副島）、5（副島、高野）、6（高野）と分担した。

12．写真撮影は副島が担当した。

13．本書の編集は田川が担当した。

（文中敬称略）

調査参加者および協力者

序

凡例

目　次

1　調査に至るまで……6
2　調査経過……7
3　位置、環境……10
4　各支石墓の説明……13
第1号支石墓……13
第2号支石墓……13
第3号支石墓……13
第4号支石墓……16
第5号支石墓……16
第6号支石墓……16
第7号支石墓……17
第8号支石墓……18
第9号支石墓……20
第10号支石墓……20
第11号支石墓……20
第12号支石墓……20
第13号支石墓……21
第14号支石墓……21
第15号支石墓……21
第16号支石墓……22
第17号支石墓……22
第18号支石墓……22
第19号支石墓……23
第20号支石墓……23

第101号支石墓……42
第102号支石墓……42
第103号支石墓……42
第104号支石墓……42
第105号支石墓……43
第106号支石墓……43
第107号支石墓……43
第108号支石墓……43
第109号支石墓……44
第110号支石墓……44
第111号支石墓……44
第112号支石墓……44
第113号支石墓……45
第114号支石墓……45
第115号支石墓……45
5　遺物……52
①石器……52
②土器……54
6　考察……58

図版目次

PL Ⅰ　遺跡近撮（昭和45年撮影）……6
PL Ⅱ　遺跡近撮（昭和50年撮影）……7
PL Ⅲ　風観岳支石墓群周辺航空写真……8
PL 1-1　第1号支石墓・南西側面……24
PL 1-2　第1号支石墓・南側面……24
PL 2-1　第2号支石墓・正面……25
PL 2-2　第2号支石墓・側面……25
PL 3-1　第3号支石墓・撑石……26
PL 3-2　第3号支石墓・背面……26
PL 3-3　第3号支石墓・土坑……27
PL 4　第4号支石墓……27
PL 5-1　第5号支石墓・下部構造(北東)……28
PL 5-2　第5号支石墓・下部構造(東南)……28
PL 6-1　第6号支石墓・東側面……29
PL 6-2　第6号支石墓・撑石……29
PL 6-3　第6号支石墓・下部構造(南)……29
PL 7-1　第7号支石墓・下部構造……30
PL 7-2　第7号支石墓・下部構造……30
PL 7-3　第7号支石墓・撑石……30
PL 7-4　第7号支石墓・南側面……31
PL 8-1　第8号支石墓・撑石……32
PL 8-2　第8号支石墓・南西側面……32
PL 8-3　第8号支石墓・土坑……32
PL 9-1　第9号支石墓・撑石……33
PL 9-2　第9号支石墓・支石……33
PL 10　第10号支石墓……34
PL 11　第11号支石墓……34
PL 12　第12号支石墓……35
PL 13　第13号支石墓……35
PL 14　第14号支石墓……36
PL 15-1　第15号支石墓・昭和45年撮影……36
PL 15-2　第15号支石墓・昭和50年撮影……37
PL 16　第16号支石墓……37
PL 17-1　第17号支石墓と第7号支石墓……38
PL 17-2　第17号支石墓と第7号支石墓……38
PL 18　第18号支石墓……39
PL 19　第19号支石墓……39
PL 20　第20号支石墓……40

PL 101　第101号支石墓……46
PL 102　第102号支石墓……46
PL 104　第104号支石墓……47
PL 105　第105号支石墓……47
PL 106　第106号支石墓……48
PL 107　第107号支石墓……48
PL 109　第109号支石墓……49
PL 110　第110号支石墓……49
PL 111　第111号支石墓……50
PL 112　第112号支石墓……50
PL 113　第113号支石墓……51

PL114　第114号支石墓……51
PL115　第115号支石墓……52
PLⅣ　出土遺物（石器）……56
PLⅤ　出土遺物（土器）……57

挿図目次

Fig 1　風観岳支石墓群附近地形図(1/5000)…9
Fig 2　風観岳支石墓群配置図(A地点)(1/500)……11
Fig 3　風観岳支石墓群配置図(A・B地点)(1/2500)…12
Fig 4　第3号支石墓実測図(1/10)……15
Fig 5　第8号支石墓実測図(1/10)……19
Fig 6　支石墓集計表……41
Fig 7　石器実測図……53
Fig 8　土器実測図……54
Fig 9　土器実測図……55
Fig10　西北九州における支石墓分布図……62

調査風景

1 調査に至るまで

風観岳支石墓群の所在が確認されたのは、昭和45年である。この年2月、長崎、大分両県間を結ぶ九州横断高速自動車道の構想が公表された。長崎県文化課は、この年、国庫補助を得て埋蔵文化財分布調査を実施することとなったが、路線通過予定が、長崎市と、大村湾東岸の3市2町に及ぶところから、大村湾東岸地区分布調査として実施した。この分布調査で多くの新しい遺跡発見があったが、最も重要な発見の一つが風観岳支石墓群であった。

現地は、諫早、大村の両市境界をなすなだらかな鞍部に位置し、一部畑地として開墾され、下部構造の明瞭なものを含めて約10基が認められ、翌、昭和46年2月、位置図作成の作業を実施した。現地は、畑地を含めて放置状態に近く、現地に至る道路も狭隘なところであり、関係者の指導と巡視の頻度を増して保護につとめたが、昭和49年夏、数基が損壊されていることが判明した。

県文化課は、県文化財専門委員、関係市当局等と現地協議を行い、確認調査と保護策の早急な立案と実施が指摘された。

調査は、周辺の山林をも含めて、地形実測と基数確認、一部の遺構についての発掘を実施した。諫早市を事業主体とし、国、県の補助事業として県文化課が中心となって調査は昭和50年秋に実施したが、調査の立案から調査の実現まで、文化庁はじめ関係市当局および地元民の方々の努力に負うところが多かった。記して深甚の謝意を表したい。

PL 1　遺跡近撮（昭和45年撮影）東より

2 調査経過

昭和45年11月5日　調査に先き立ち関係各方面へあいさつをすませ現地へ向う。昼食後器材収納テントの設営と供養を行う。

翌日から本格的な確認調査に入るのであるが、その方法としては、確実な基数把握を第一とするので最初の5日間は調査員全員でこれにあたることとし、写真撮影、下部構造の確認のための発掘調査は日数的制限を受けるので各群から1基とし、2基を調査することとした。

11月6日～8日　雨のため調査できない日もあったが、A地点の調査を行う。確実と考えられるもの15基、不確実なもの3基、計18基をリストアップする。正林帰庁。

11月9日～10日　主としてB地点の調査。確定的なものがなく、不確実なもの6基。これで計23基となる。地形測量開始。

11月11日　各支石墓の写真撮影および支石墓の傍に、目印として番号を附し赤く塗った杭を打つ作業にかかる。

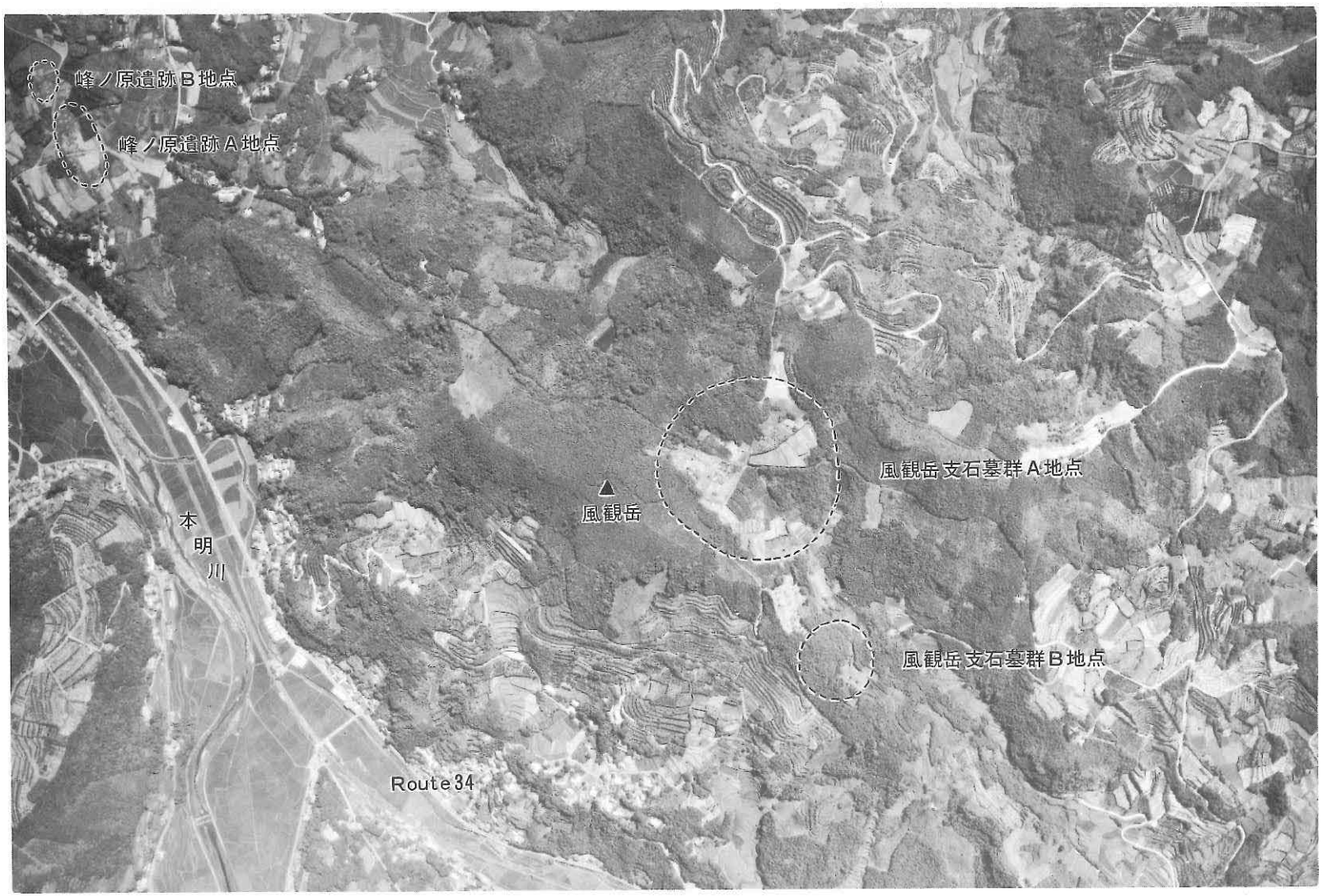
11月12日　第7号支石墓を清掃中すぐ隣接して同形状、同規模の支石墓を発見。第17号とする。下部構造は箱式石棺と思われる。また2撑石間から壺の破片を採集する。

11月13日午後～14日　雨のため作業中止。市役所で今後の作業の打ち合わせをする。

11月15日　午後2時から一般市民によびかけて現地見学会を開く。参加者約100人。

11月17日～20日　第3号、8号の撑石をはずす。下部構造は両者とも土坑である。調査完了後復原する。この間耕作者からの情報を基に確認調査を続け、総数35基となる。

PL II　遺跡近撮（昭和50年撮影）西より



PL III　風観岳支石墓群周辺航空写真（市農林課提供）

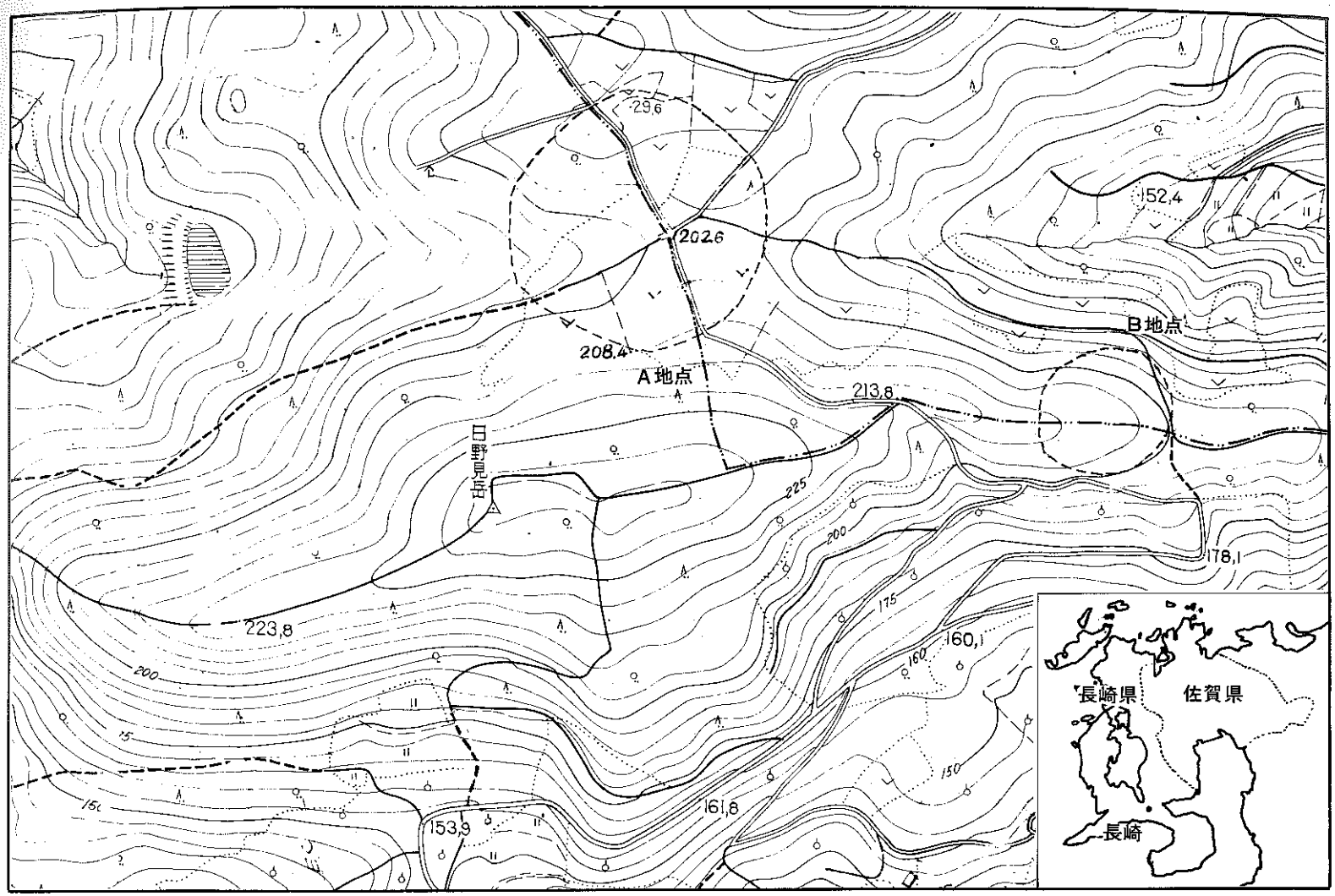


Fig 1　風観岳支石墓群附近地形図　縮尺 $\frac{1}{5000}$

3位置・環境

諫早市は長崎県の中央部に位置し、長崎、大村方面、西彼杵半島、島原半島に至る交通路の要所で、北に雄大な多良山麓、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾と三方海に囲まれ、県下一の水田面積を有する。(PLⅣ)

多良岳、経ケ岳、五家原岳等の多良山麓が発達し、数十条の河川が走り山麓裾野に幾多もの扇状地を形成している。五家原岳を源とし、湯野尾川、富川を上流とする本明川は北から南へ流れ、多良山麓裾野と日岳、風観岳(標高236m、玄武岩を基盤とする。)の山陵北東斜面裾野を東南にかけ流れ、小河川を含有して下流域に現市街地である扇状地を形成し有明海に注いでいる。

近世に確立された長崎街道(小倉↔長崎)が大村側より風観岳鞍部を通り破篭井町に下って、現在の諫早ニュータウン、矢上を抜けて長崎に至る。風観岳の鞍部は大村藩と佐賀藩との藩境でもあった。

風観岳支石墓群A地点

風観岳支石墓群A地点は、風観岳南斜面の鞍部の標高約215m～192mに位置している。現状は一部畑地が残り、ほとんどが植林されている。鞍部は西から東南にかけ傾斜する谷部になっている。その傾斜面、およびその両斜面にA地点の支石墓群のほとんどが集中している。又、鞍部の北西にかけての谷部東斜面上にも3基確認されている。(Fig1.2)

B地点

B地点は、風観岳の山陵部分の南斜面上の標高約200m～205mに位置し、2基確認された。その尾根上には郡境の石積遺構が数ケ所見られる。又、直線距離にして約0.8km東南方向にA地点がある。

石材供給地

風観岳支石基群の石材である玄武岩は、この一帯の基盤層でもあり山陵全域に渡り自然露頭がみられるが、風観岳山頂より標高約230mまでの南斜面と北斜面に特に多数露出している。それとB地点も同様で、支石墓の石材供給地と考えられる。

遺物散布地

第7号支石墓の西側斜面一帯は現在畑地で、その地点より縄文時代晩期の土器片、剥片類を採集した。又、第104号支石墓周囲の標高約215mの平坦な尾根上に同じく晩期の土器片、石鏃、剥片石器類を多数表採した。

周辺関連遺跡

峰ノ原遺跡A、B地点では縄文時代晩期の資料が多数発掘されている。(1975年報告書刊行)同様に晩期の遺跡として多良見町・伊木力川遺跡がある。周辺には他に縄文時代晩期の遺跡は現在発見されていないが、将来発見されることを期待したい。

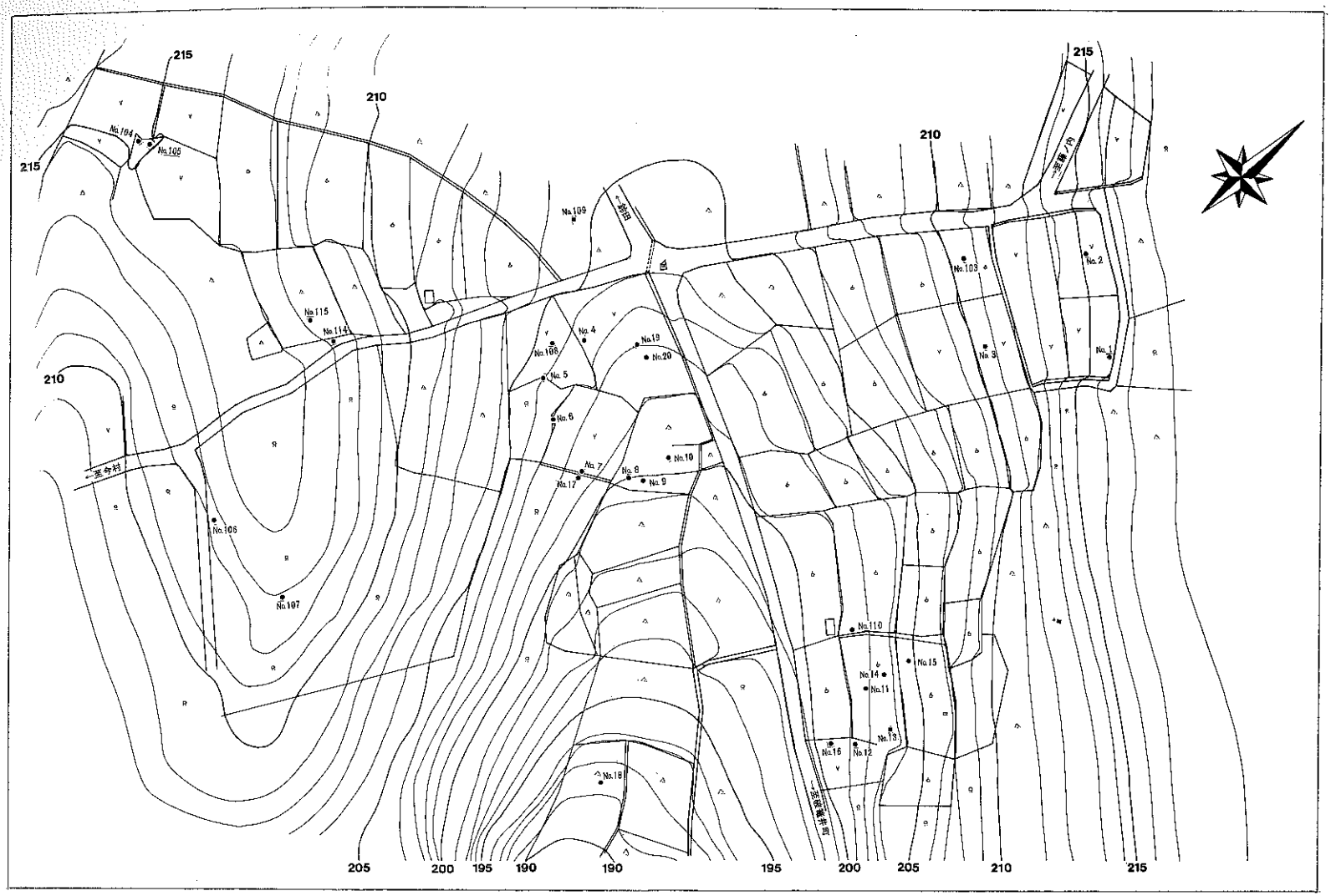


Fig 2　風観岳支石墓群配置図（A地点）　縮尺 $\frac{1}{500}$

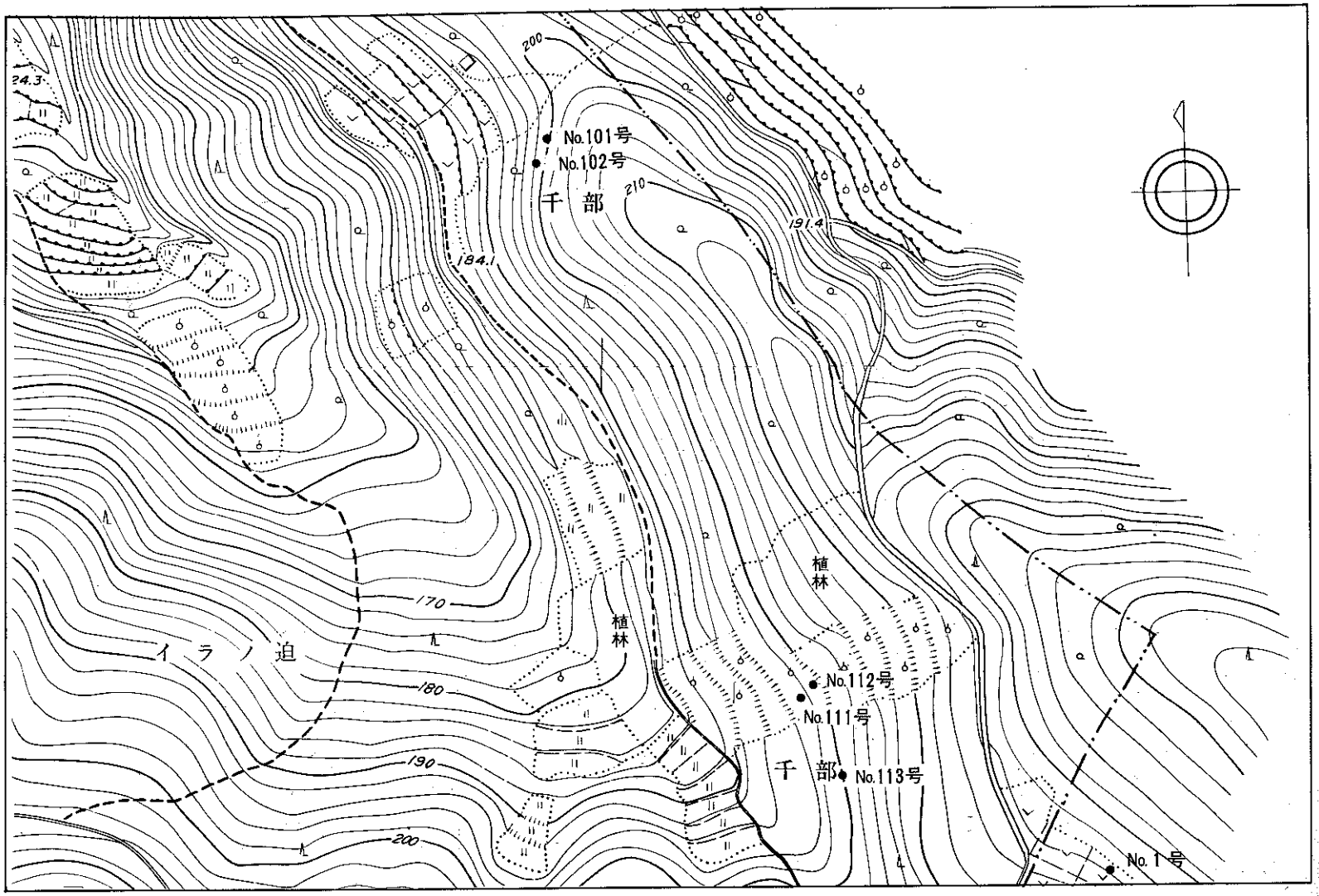


Fig 3　風観岳支石墓群配置図（A・B地点）縮尺$\frac{1}{2500}$

4 各支石墓の説明

風観岳支石墓群は、地形、環境的にみて、A地点（諫早市と大村市の一部）とB地点（大村市）の２地点に別けられ、A地点には33基、B地点には２基の支石墓が群在する。

確認調査によって下部構造が明確で、あるいはそうでなくても明確に支石墓と考えられるものとそうでないものとに別け、それぞれ第１号～第20号、第101号～第115号の番号を附した。

以下各支石墓ごとに説明を加えてゆく。

第１号支石墓

風観岳山麓の西斜面標高216ｍのA地点の支石墓の中では一番高所に形成されている。畑の開墾時に下部構造である箱式石棺が半分位壊されて露出している。現在、側板石と見られる約70cmの板石が１枚で700kgに近い撐石を支えている。板石の上には、風観岳支石墓群に普遍的に見られる下部構造の構築法である数個の小板石をのせ蓋石としている。

撐石はほぼ方形で125cm×125cm、厚さ約15cmを計る。箱式石棺の方向は、北西から東南。（PL１－１、１－２）

第２号支石墓

正確な表現をすると支石墓（Dolmen）、ではない。立石（Menhir）である。畑の真中に立直している。立石であることは２つのことが考えられる。すなわち、築造当時は支石墓であったが、いつの頃か耕作に邪魔になるとして畑の端まで運ばずにいくらかでも耕作面積を広くしようとして立てた場合と築造当時から立直したままの場合である。後者の場合は多分に各グループごとの標式的意味合いをもつものと考えられる。A地点における立石は２例ある。（第110号）

現在露出している部分は、160cm×90cm×40cmで、どの位深く入っているかは不明。（PL２－１、２－２）

第３号支石墓

風観岳・鞍部のなだらかに傾斜する北斜面上の標高約210ｍに位置する。現状は畑地で、周囲には第１号～２号、103号支石墓があり以前にはこの斜面上一帯に相当数の支石墓が存在していたと考えられる。（畑地耕作の際に除去し、周囲の畑地の石垣、及び側溝の両側に立てかけてある。又、近年庭石に利用する為持ち去る状況等もあり、今回の確認調査の発端の原因でもあった。）

撑石　撑石は、扁平で約90～160 cm×210 cm×30 cmの台形状を呈し、玄武岩質で重量約2893kgと推定される。地形的な傾斜に比べて短軸は西から東側に傾むき、長軸は、ほぼ水平位置にある。撑石の長軸は北東の方向を向いている。撑石下約５～10cmで、約１ｍ×06ｍの楕円形状の範囲に黒色土の落ち込み（土坑）を検出した。その黒色土は粘質性が強く、固い。その上面に扁平な粘板岩の塊石が３～４枚程乗っている。

支石　支石は４個確認出来た。その内３個は、厚さ約６～10cm、巾約20～30cmの塊石で、撑石上端の北隅にこの３個、下端の南隅に１個の支石が使用されている。

下部構造　南北に長軸をもち、長さ約140 cm、巾約30～40cm、深さ約20～30cmのほぼ長方形の土坑墓である。（土坑墓の下端は、長さ約130 cm、巾約20～30cmで、同様に長方形状を呈している。）土坑の北端部分の壁は、一部撹乱気味の状況がみられる。又、北壁面は撹乱を受け大部分不明であるが、棺床面上に一部分残されており、その部分までが土坑墓の範囲と考えられる。その北壁の両側壁面上端の部分も、一部撹乱を受けている。しかし両側壁は、垂直に近い状態で立ち上っている。土坑の南端部分は浅く、それより約90cmの所より約20cmの段差で一段落ち込みがみられる。又、長方形土坑南端の西壁面に１枚板石が倒れた状態で検出されたが、その東壁面はなだらかな傾斜で棺床面に至るので、その部分的な側壁面として利用された可能性も一概に否定出来ない。又、土坑に木蓋を使用する可能性も十分考えられるので、その際に扁平な板石を乗せた状況等も考慮する必要があるものと思われる。又、撑石の東側ぎりぎりに土坑の位置がある。

第３号支石墓の出土遺物はなかった。

（Fig４、PL３－１、３－２－３－３）

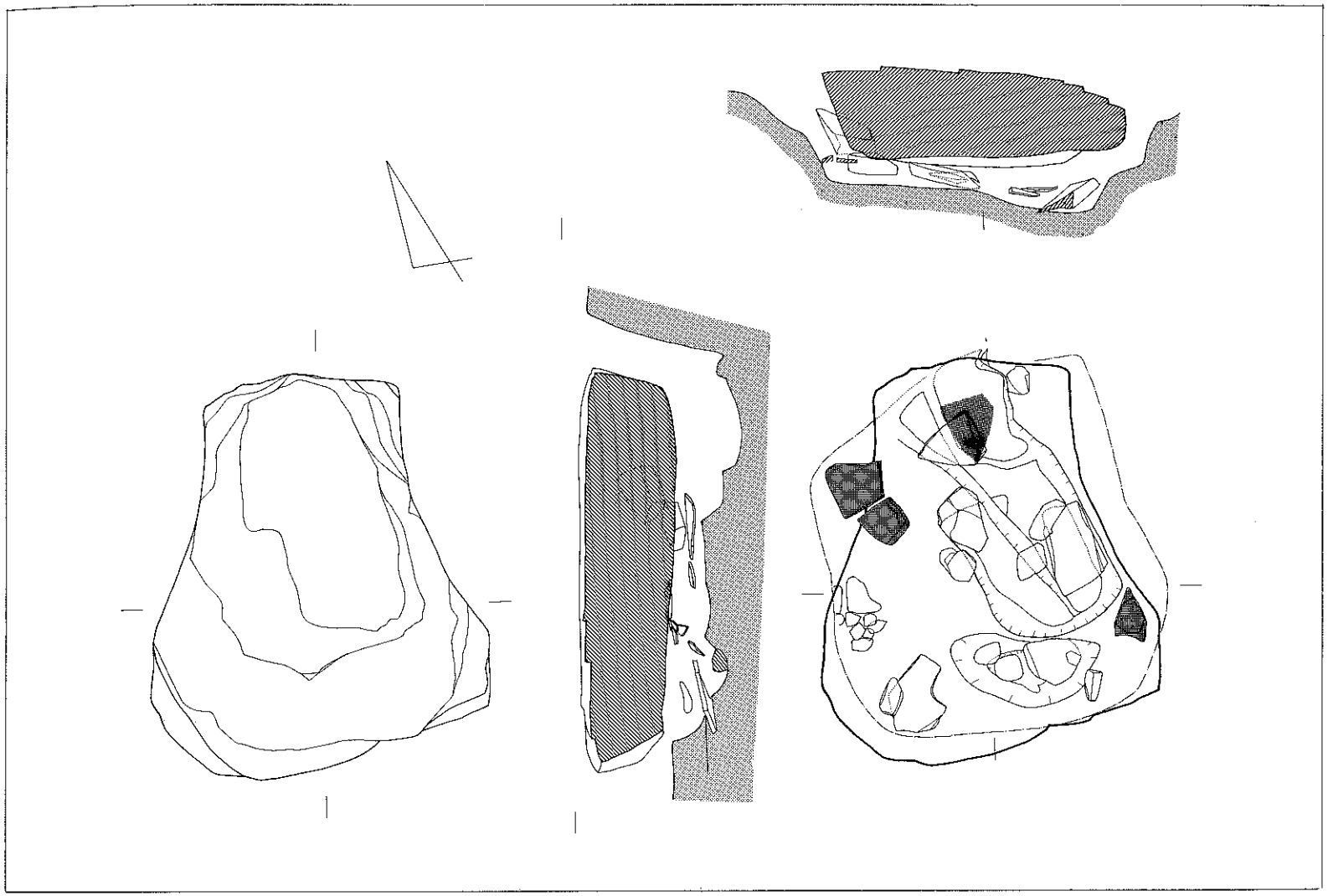


Fig 4　第3号支石墓実測図　縮尺$\frac{1}{10}$

第４号支石墓　昭和45年発見当時の写真である。現在は、第６号支石墓同様破壊されて現存しない。

撑石は、推定160cm×210cm×30cmであり、支石も何個あるかは不明だが見える。検土杖によれば側板石の一部残存があるようである。

撑石、側板石の一部は耕作時に取りはずされ、石垣等に使用されている。鞍部の南西斜面に位置するこの畑には、比較的多くの支石墓があったと考えられる。現在、３基を確認しているが、そのうち２基は土中に埋没しており、下部構造は箱式石棺と考えられる。（ＰＬ４）

第５号支石墓　第４号支石墓と隣接しており、同斜面の上位の畑と雑木林の境界にふた抱えもある撑石が斜面に沿ってずり落ちたような格好であったが、昭和49年庭石として持ち去られてしまった。この時第６号支石墓を含めて数墓が破壊を受け、今回の確認調査となった。残念なことにこの支石墓の撑石の写真はない。

下部構造が残存するかも知れないので、周辺を少し掘る。不幸中の幸いであった。下部構造は破壊されずに残っていた。やはり、第１号、第６号、第７号等に普遍的にみられる構築法をとっており、小さな板状石を積みあげ、撑石と下部構造を区別している。これらの板石の下には恐らく箱式石棺が未破壊のまま残存しているものと推定される。箱式石棺の寸法は、検土杖によれば約110 cm×55cmである。支石と考えて良さそうな石も何個か残存するが、撑石がなくなってしまった現在、推定に止どまり確言できない。

ＰＬ５－１の手前にある大きな斜めの板状石は最近置かれたもので、これもやはり箱式石棺の石材と考えて差し支えないようである。同じ畑の中にあったのだろう。（ＰＬ５－１、５－２）

第６号支石墓　昭和45年、長崎県文化課（当時文化財課）が実施した九州横断高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財の分布調査の際、いわゆる風観岳支石墓群の発見の端緒となった記念すべき支石墓であったが、昭和49年６月文化財パトロールの際、壊滅していることに気付き急拠今回の確認調査となる起因となった支石墓である。写真は、昭和45年発見当時のものであり、構築法はやはり他の同類のものと同様で、箱式石棺の上に板状石で蓋をして、さらに小さな板状石を積みあげ、その上に撑石を積せている。支石の有無、個数は不明である。

箱式石棺の南短辺は損失しており、両側板も圧力を受けて広がっている。

撑石は推定であるが、130 cm×100 cm×22 cmで、近辺から産出する玄武岩を使用している。また、箱式石棺の長軸と撑石の長軸が合うように上手に載せており、方向は北西から東南である。

第7号、第17号支石墓と実距離にして僅か15mしか離れておらず、第8号、第9号支石墓等とあわせて1つのグループを形成しているものと考えられる。この畑には、黒耀石剥片、土器片等の遺物が散布している。

（PL6－1、6－2、6－3）

第7号支石墓　現状は、鞍部に東面する斜面の雑木林で、第6号支石墓の東南約15mにあり、畑の側溝を掘る際、下部構造の箱式石棺を半分位壊しており、残存する側板石等から推測して箱式石棺の東南の一角であると考えられる。箱式石棺の復原推定値は約100 cm×55cmである。

下部構造の特徴は、第1号、第5号、第6号支石墓等に普遍的にみられる小さな板状石を箱式石棺の上に積みあげ、さらに支石を配していたことであろう。現在、支石の確認はできないが、隣接する第17号支石墓（撑石と撑石の間はわずか数センチメートルしかない）には支石と考えられる石があるところから、当然第7号支石墓にもあったとみて差し支えないと思われる。

撑石は、風観岳支石墓群の中では比較的大形のものに属し、190 cm×130 cm×35cmで長方形を呈し、重量は2481kgである。石質はやはり玄武岩と思われる。

調査終了時に保護のため、側溝で掘り取られた部分がこれ以上の破損を受けないように、また、撑石が落ちないように芯張りと土止め作業をしている時に、撑石下、箱式石棺外の崩壊した東南端の部分から打製石斧（Fig7、PL、Ⅳ）と壺の破片（口縁部から胴部にかけて約⅓）を採集した。（Fig8、PL Ⅴ）1個体分あると考えられるが、遺物の取りあげは、正式な調査まで待つこととし、原位置のまま保存している。

また、第17号支石墓の撑石との間からも壺破片1個を表採した。（Fig8、PL Ⅴ）

（PL7－1、7－2、7－3、7－4）

第８号支石墓　風観岳支石墓群は、Ａ地点とＢ地点の２つに分けられ、その94%が、さらにその中で確実性が強いもの20基全部がＡ地点に集中している。また、Ａ地点に群在している支石墓群は、第１号～第３号（３基）、第４号～第10号、第17号、第19号、第20号（10基）、第11号～第16号（６基）と３つのグループに大別でき、各グループの中から１基を選び下部構造の確認のため発掘調査を実施した。

第８号支石墓は、鞍部の一番低い所に位置する第２グループ（このグループはＡ地点の中でも一番基数も多く、明確な下部構造をもった一群であり、有望視する一群である。）のうちの１基で、現状は鞍部のなだらかな斜面の杉林の中に存する。

撑石は扁平で、形状は隅丸方形を呈し160 cm×160 cm×20cmを計る。石質は玄武岩で、重量を計算すると約1.5ｔとなる。他の支石墓が斜面に存し傾斜をもっているのに対し、撑石はほぼ水平に据えられている。

11月16日割り付け。撑石の実測。11月17日撑石の除去。下部構造は箱式石棺ではなくて土坑墓であった。東側の輪郭が明確でない。土坑の寸法は約185 cm×150 cmで中央部の深さは約40cm。断面は梯形を呈す。（Fig５）

土坑の中からハリ質安山岩製の剥片が１点出土する。（Fig７）　附近は黒耀石剥片、土器片等が散布しているので、土坑を掘った際混入したものと考えられる。

上面で明確でなかった東部輪郭は底部でも不明瞭で黒褐色のフカフカ土となり、終に一線を画すことはできなかった。
また、明らかに支石が認められなかった。土坑には蓋をのせずに直接撑石を載せたか、あるいは木蓋でもあったのであろうか。底部に60cm×40cmの楕円形の扁平な石があるが、人為的に布敷したものではなく、地山（黄色粘質土層）に混入している礫と考えられる。副葬品はない。

11月21日写真撮影後、旧状に復す。

風観岳支石墓群は、下部構造に箱式石棺をもち小板石を小積むものと土坑墓が存在することが判明した。しかもその土坑墓は支石を持つもの（第３号支石墓）と第８号支石墓のように支石を持たないものがあることも判明したが、反面多くの問題をも投げかけた。これらの問題は系統的な調査を続けていくことによって氷解されていくことであろう。
（Fig５、PL８－１、８－２、８－３）

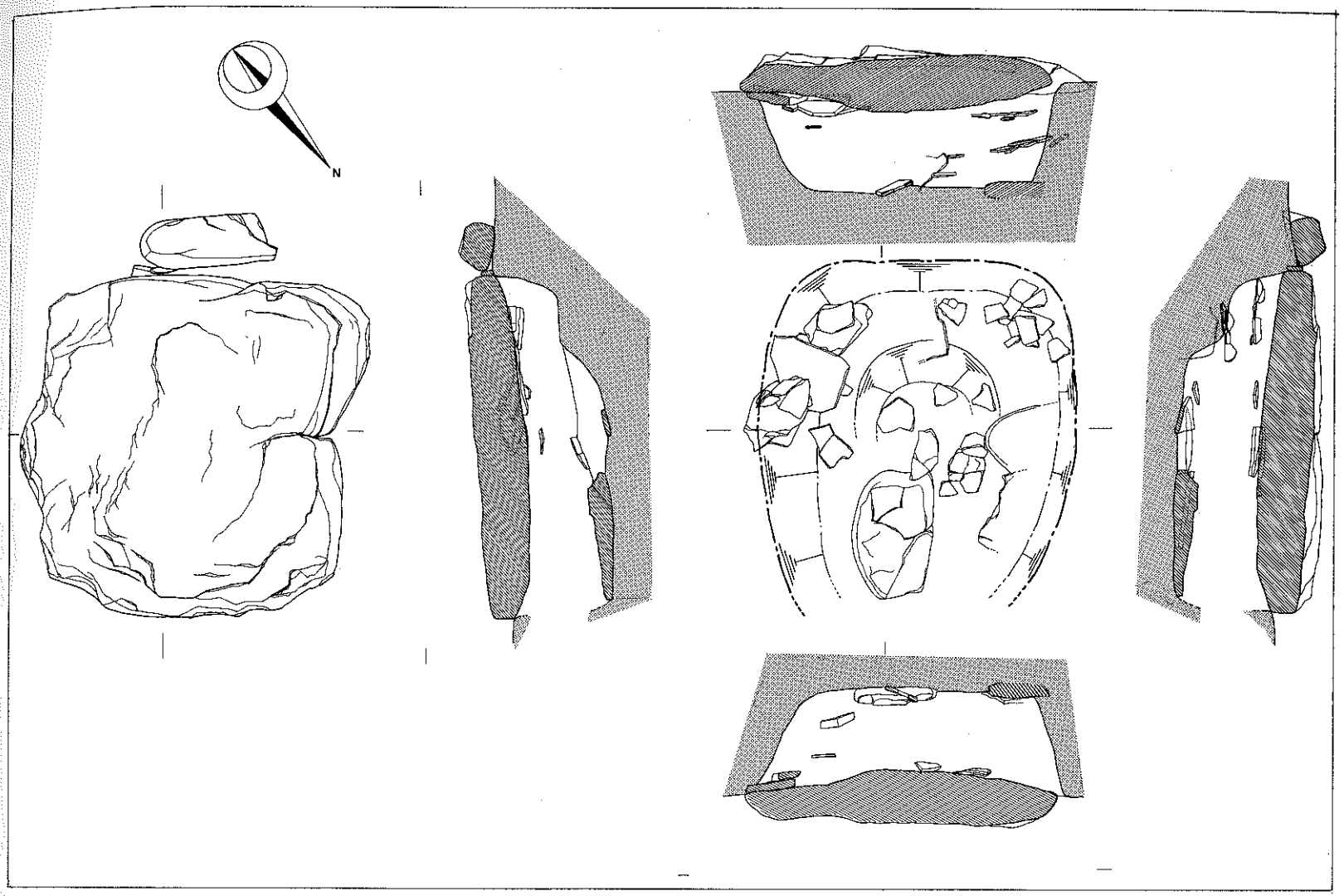


Fig 5　第8号支石墓実測図　縮尺$\frac{1}{10}$

第９号支石墓　第８号支石墓にすぐ隣接して同じ杉林内にあり、撑石は210 cm×170 cm×43cmとかなり大きく、巨石文化の名に恥じないものである。重量も4405.7kgと重い。

支石は２個確認されているが下部構造は一切不明である。

写真撮影のため周辺を清掃中、丹塗りの壺の破片１個を採集した。（Fig8、PL Ⅴ）

附近の検土杖探査の結果、まだかなりの基数が土中に残存する可能性も強く、注意を要する地点であろう。（PL9－1、9－2）

第10号支石墓　第８号、第９号支石墓と同じグループに属し、鞍部の最下底部に位置する。現状は杉林で、附近一帯の検土杖による探査ではかなり広範囲に分布しているようだが、埋没しているため真偽、規模等不明点が多い。

第10号支石墓も埋没しており、かなり大きい撑石である。本来地表に露出しているといわれる点から考えて、あるいは違う可能性もあるが、反面鞍部の最下底部にあることから考えて埋没した可能性もあり、側板石らしいものに当ることから一応支石墓としてリストアップした。（PL10）

第11号支石墓　風観岳の南麓斜面に位置する第３のグループに属するもので、標高200 m～205 mに現存７基が群在する。その中に１基だけ、第２号支石墓と同様なメンヒル(?)があり（第110号支石墓）、各グループに１つの標式があったと仮定するのは早計であろうか。

下部構造、支石の有無、個数等は不明である。

撑石は、160 cm×135 cm×50cmのほぼ円形をした玄武岩で、重量は3099kgである。

（PL11）

第12号支石墓　第11号支石墓と同様な立地、環境にあり、第３のグループを構成する１基である。この一群が群在する地点の現状は密柑畑で、下部構造の確認は、密柑の根を痛めるということで、第14号を除いて深く掘り下げることは止めたため、下部構造、支石の有無、個数等は一切不明である。また、撑石についても同様で、現在露出している部分のみの計測値であるので、しかるべき時にきちんと計測すべきであろう。撑石寸法　150 cm×140 cm×20cm　石質　玄武岩　重量　1205kg

（PL12）

第13号支石墓

下部構造は、検土杖による確認である。状況から判断して、箱式石棺であろう。支石の有無、個数等は不明である。

撑石の形状は、第３号支石墓と似ており、寸法は200 cm×120 cm×20cmで例にもれず扁平である。石質は玄武岩で、重量は約1378kgである。（PL13）

第14号支石墓

このグループの中でただ１つ下部構造が明確な支石墓である。側板石１枚を残存している。箱式石棺であろう。棺床と思われる部分にやはり板石が１枚あり、故意に敷いたものか、側壁が棺内に倒れ込んだのかはわからない。

箱式石棺を埋設する際の掘り方も、一部側板石が残存する部分は、側板石に接して東側にまわりこむが、南および西は耕作のため壊されており不明である。

撑石は持ち去られている。（PL14）

第15号支石墓

風観岳の南麓斜面の標高205 mに位置し、鞍部をはさんで第２グループと相対している。

このグループの中で、撑石は200 cm×155 cm×30cm、重量約2224kgと比較的大きい。支石墓は約25度の傾斜地に構築されている。石材供給地である風観岳山頂に一番近い支石墓である。

昭和46年２月　県文化課（当時文化財課）は、支石墓群の地形測量および配置図を作成すべく調査を実施した。その際、下部構造確認のためこの支石墓を調査した。PL15－１はその時撮影した写真である。

下部構造は、小さな板状石が撑石と離れて積んであり、その間には土が堆積していたが箱式石棺となるであろうということで、その段階で一応調査を中止し旧状に復した。支石は明確なもの１個を確認した。

撑石の周囲には剝落した石が多く見られたことからして、構築当時は地表面よりかなり露出していたものと考えられる。

出土遺物なし。

（PL15－１、15－２）

第16号支石墓　風観岳の南麓裾に位置し、現状は畑である。耕作時に鍬が大石に当るという地主さんの情報で、その附近を掘り広げた。巨石が２個と小石２個で一群をなしている。巨石は２個ともいままで確認してきた中で最小の部類に属し、110 cm×84cm×17cm、106 cm×90cm×20 cmと小さく、また重量も軽い。（約406 kg、548 kg）

下部構造、支石の有無、個数等は不明であり、疑点は残るが一応念のためリストアップした。（PL16）

支石も個数は不明であるが確認できる。

撑石は風観岳支石墓群の一般的な玄武岩で楕円形の形状を呈し、寸法は202.5cm×140 cm×22cmで、重量は1790kgである。扁平な石を使用しているので比較的軽い。第７号支石墓と並列している様を眺めるのは何とも言いようがなく圧感である。並列している支石墓は、風観岳支石墓群においては初例である。将来まで大事に保存したい支石墓である。

第７号支石墓打石との間から土器片が１点出土した。（PL17―１、17―２）

第17号支石墓　第７号支石墓とほんの数センチメートルしか離れていない。第７号支石墓を写真撮影のため清掃中に発見したもので、枯葉、腐葉土に埋もれ、ツタ、カヅラ等の植物が繁茂していて、分布調査ができずに発見されなかったものであろう。

標高約 200 m の鞍部に東面する斜面に構築されており、下部構造はこのグループを形成している第５号、第６号、第７号支石墓等の状況からして、同様な箱式石棺と考えられ、さらにその上に小板石を積みあげて蓋石とした構造ではないかと思われる。

第18号支石墓　いままで確認してきた風観岳支石墓群は、最低でも２基、普通だと数基以上かたまってひとつの群を構成しているのに、第18号支石墓は１基だけ飛び離れて存する。地形的には鞍部の一番下にあり、すぐ傍を小川が流れる。

風観岳支石墓群の構成からみて、単に１基だけの存在は考えにくく、附近に他にあるかあるいはあったかも知れない。

撑石は、いままでのものの中で一番大きくまた、重量も一番重い。石質はやはり玄武岩と思われる。（PL18）

第19号支石墓　　撑石はすでに除去されてない。地主さんの情報を基に畑を掘り、下部構造だけが遺存しているのを検出した。小板石を積んで蓋石としている点は他の支石墓の場合と同じで、石と石の隙間に空間があることからみて、多分箱式石棺であろう。

すぐ近くに１ｍ位の石があるが、あるいはこの石が撑石であったのかも知れない。これらは全部埋没しており、土の堆積は南に深くなっていく。

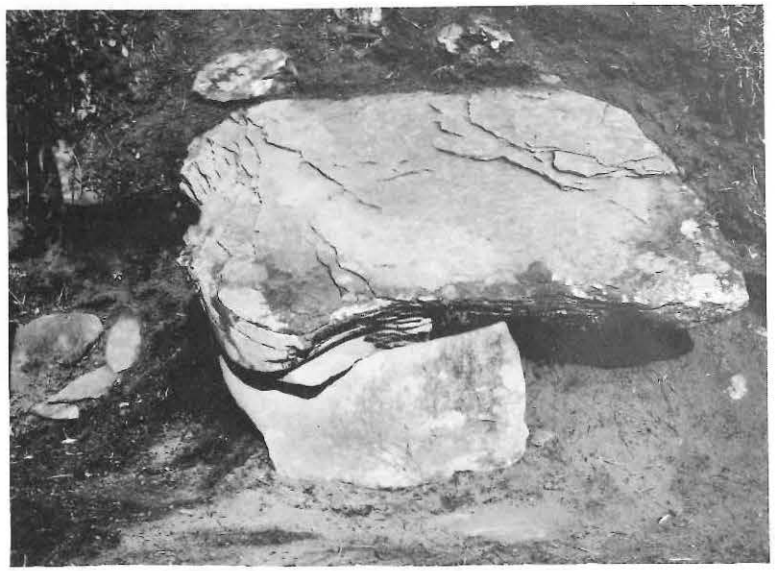
（PL19）

第20号支石墓　　第19号支石墓と同じ畑中にあり至近距離に位置する。これも第19号支石墓同様、地主さんの情報により確認した。地表下約30cm位で撑石にあたる。撑石周辺の集石状況等からみて、下部構造はやはり箱式石棺と考えられ、可能性が強い。支石の有無、個数等は不明。

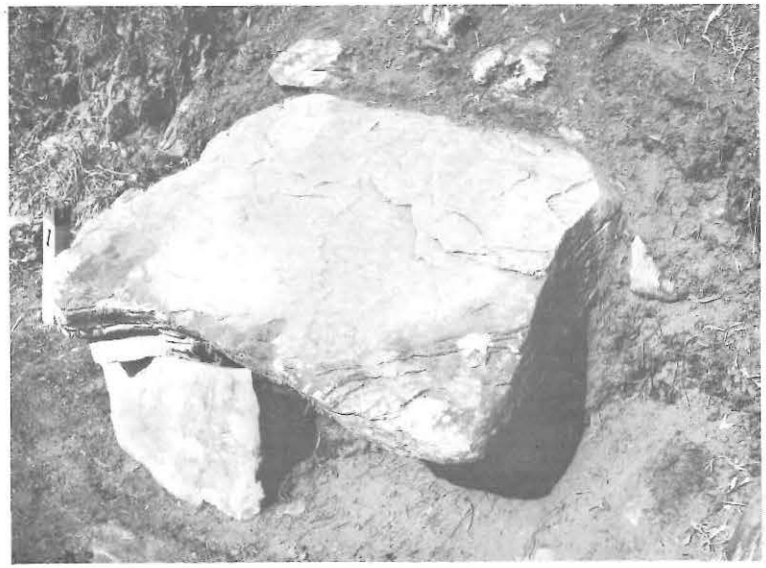
この畑を含めた周辺の畑には、かなり多くの支石墓が存在していたと考えられる。現存するものは僅か５基しかないが、畑全部を調査すればあるいはもっと沢山の基数が確認できるものと思われる。畑の周囲、畦、側溝、石垣寺に支石墓の石材と考えられるものが多数使用されており、この鞍部だけでも推定約40～50基以上の支石墓が構築されていたものと思われる。

昭和45年発見当時は、高所から鞍部の一望ができたが、現在では各畑に杉・檜等の植林がなされ、視界を防げている。現在、畑のまま残っているのは僅か３筆だけであるが、２～３年のうちには同様に植林されると聞く。従って、２～３年のうちに第２次の緊急確認調査を実施し、明確に実態を把握する必要がある。

第1支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1009
地目（現状）		畑地（荒地）
土地所有者		岸　沖太郎
撑石	寸法	125×125×15cm
	形状	方形
	石質	玄武岩
	重量	672.66kg
下部構造	種類	箱式石棺　板石1枚残存(どの部分か不明)
	寸法	70cm
	支石	無
特記事項		畑開墾の際、露出したもの

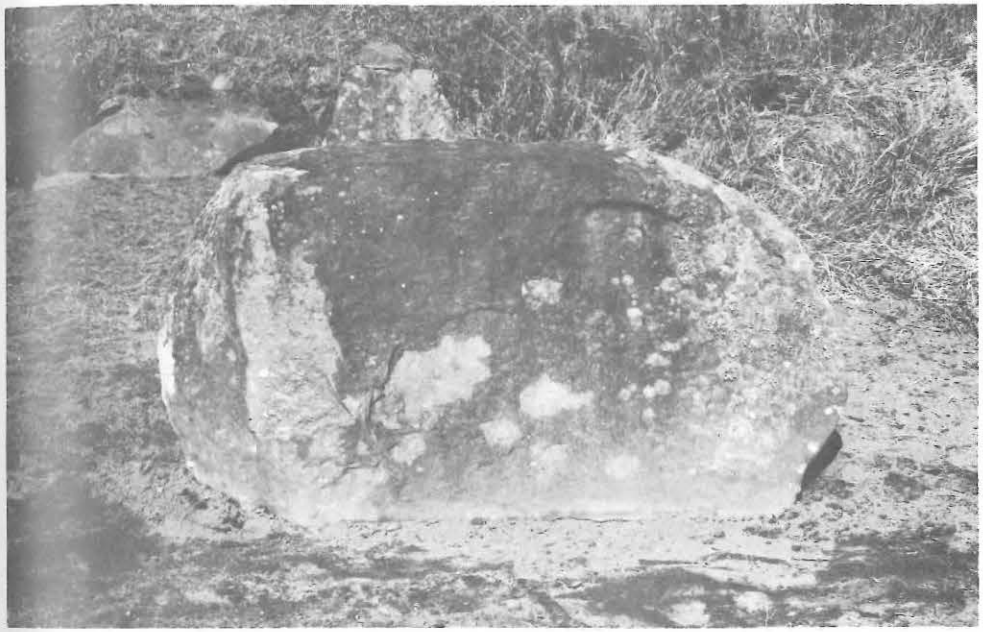


PL 1-1　第1号支石墓・南西側面



PL 1-2　同左

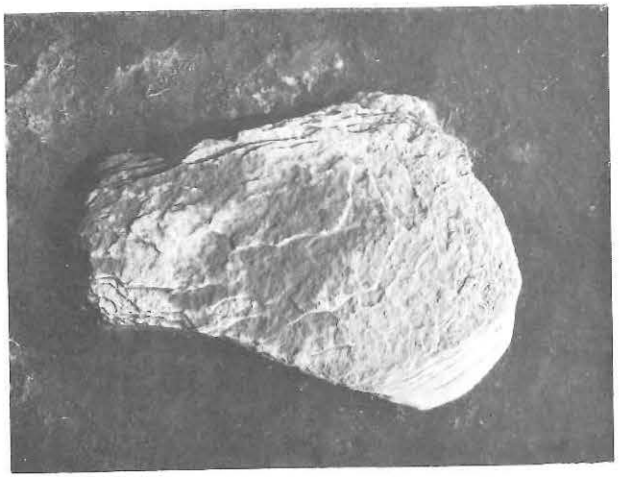
第2号支石墓		
所在地		諫早市破竜井町1009
地目（現状）		畑地（荒地）
土地所有者		岸　沖太郎
撑石	寸法	160×90×40cm
	形状	方形
	石質	玄武岩
	重量	1653.12kg
下部構造	種類	箱式石棺
	寸法	40×50cm
	支石	無
特記事項		畑周辺の境界に多数の板石あり
		メンヒル(?)



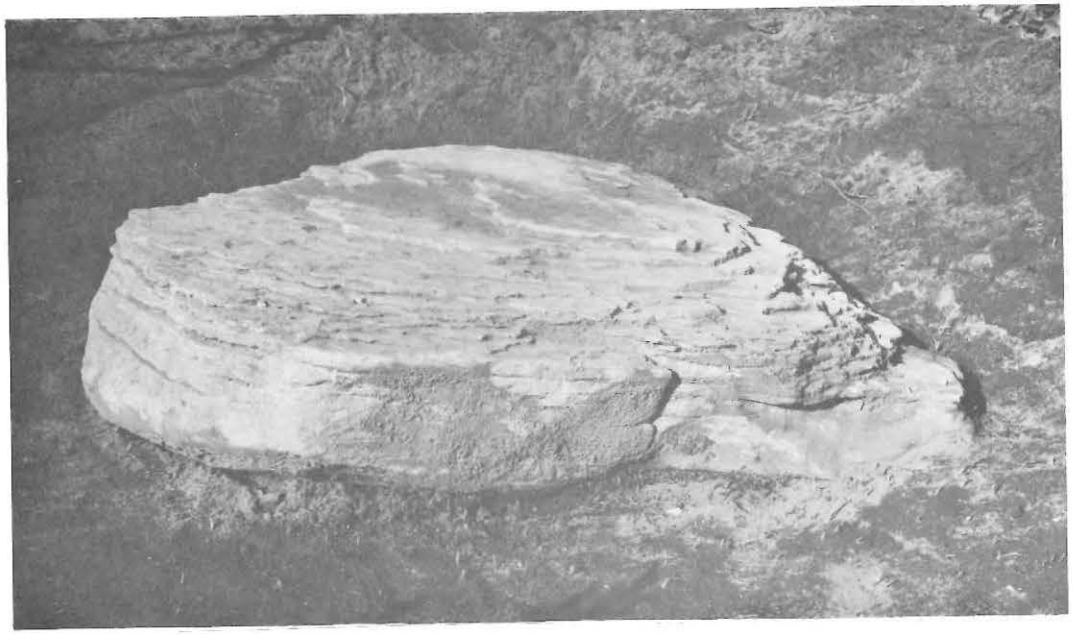
PL 2-1　第2号支石墓・正面

PL 2-2　同側面

第3号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1007
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		荒木作蔵
撑石	寸法	160×210×30cm
	形状	長方形
	石質	玄武岩
	重量	2892.96kg
下部構造	種類	土坑
	寸法	140×40cm
	特徴	長方形
	支石	4個
特記事項		S50発掘調査



PL 3-1　第3号支石墓・撑石



PL 3-2　同背面

PL 3-3　第3号支石墓・土坑

第4号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1003
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		藤田　康
撑石	寸法	160×210×30cm（推定）
	形状	長方形(?)
	石質	玄武岩(?)
	重量	1033.2kg(?)
下部構造	種類	箱式石棺(?)
	支石	有(?)個）
特記事項		側板石ははずされ、畑の石垣に使用されている

PL 4　第4号支石墓

第5号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1002第1
地目（現状）		原野（雑木林）
土地所有者		藤田　康
撑石	寸法	200×150×30cm
	形状	円形
	石質	玄武岩
	重量	2583.0kg
下部構造	種類	箱式石棺
	寸法	110×55cm
	支石	不明
特記事項		撑石はなくなって、下部構造だけ残存

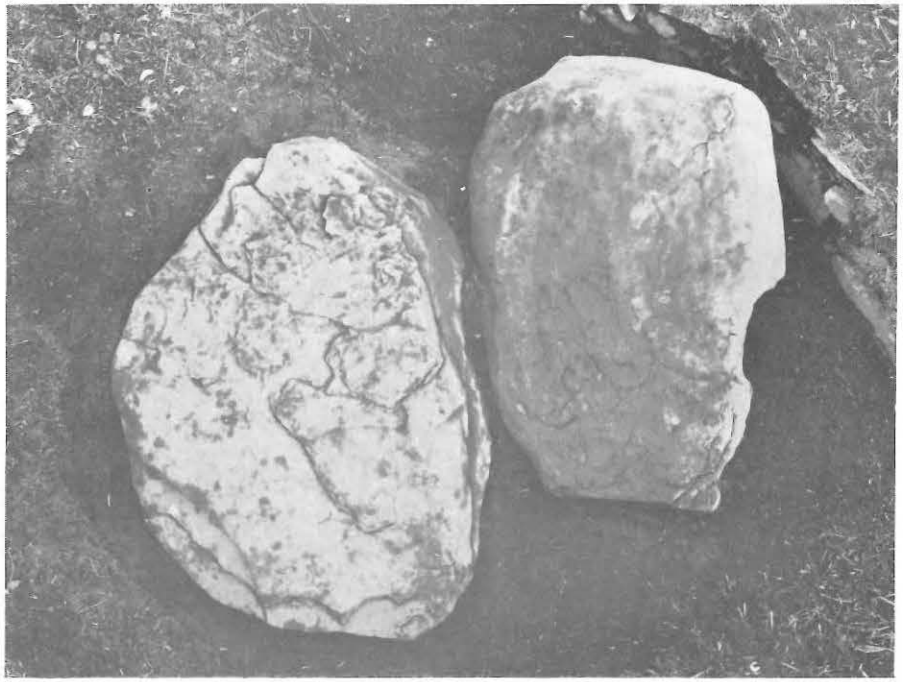
PL 5-2　第5号支石墓・下部構造（東南より）

PL 5-1　第5号支石墓・下部構造（北東より）

第6号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1002第2
地目（現状）		山林（雑木林）
土地所有者		藤田　康
撐石	寸法	130×100×22cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	820.82kg
下部構造	種類	箱式石棺
	支石	無
特記事項		S45発見、滅失

(上・左) PL 6-1　第6号支石墓・東側面
(上・右) PL 6-2　第6号支石墓・撐石
(　下　) PL 6-3　第6号支石墓・下部構造（南より）

第7号支石墓		
所在地		諫早市破竜井町1001口第2
地目（現状）		山林（荒地）
土地所有者		山口鶴雄
撑石	寸法	190×130×35cm
	形状	長方形
	石質	玄武岩
	重量	2481.12kg
下部構造	種類	箱式石棺
	寸法	100×55cm
	特徴	板石木口積の天井
	支石	無
特記事項		箱式石棺は東南の一角を残すのみ
		撑石直下より壺（破片）出土



PL 7-3 同撑石
（左第7号、右第17号）

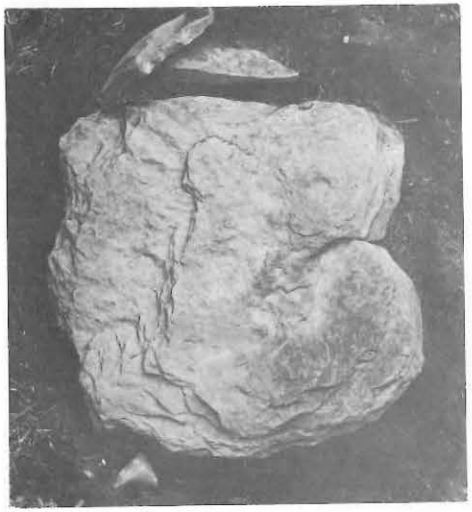
PL 7-1 第7号支石墓・下部構造

PL 7-2 同左

PL 7-4 同南側面 ▶

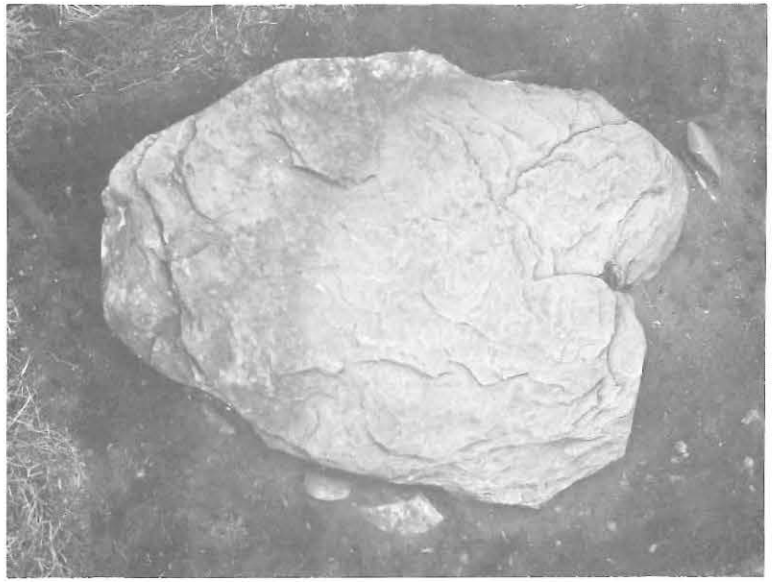
第8号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町硯石1001のイ
地目（現状）		畑地（杉林）
土地所有者		中島正一
撑石	寸法	160×160×20cm
	形状	隅丸方形
	石質	玄武岩
	重量	1469.44kg
下部構造	種類	土坑
	寸法	185×150cm
	支石	無
特記事項		S50発掘調査

PL 8-3　同・土坑



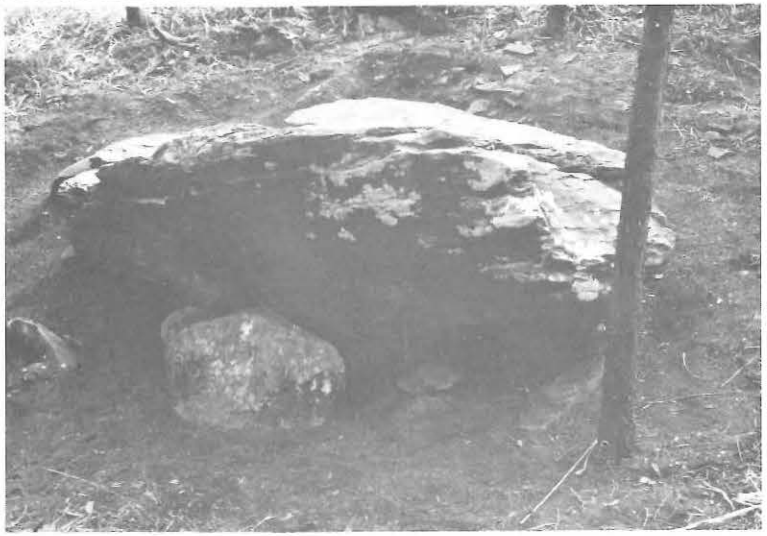
PL 8-1　第8号支石墓・撑石

PL 8-2　同・南西側面



第9号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町硯石1001のイ
地目（現状）		畑地（杉林）
土地所有者		中島正一
撑石	寸法	210×170×43cm
	形状	三角形
	石質	玄武岩
	重量	4405.74kg
下部構造	種類	不明
	支石	2個
特記事項		撑石の周囲清掃中丹塗壺破片採集

PL 9-1　第9号支石墓・撑石

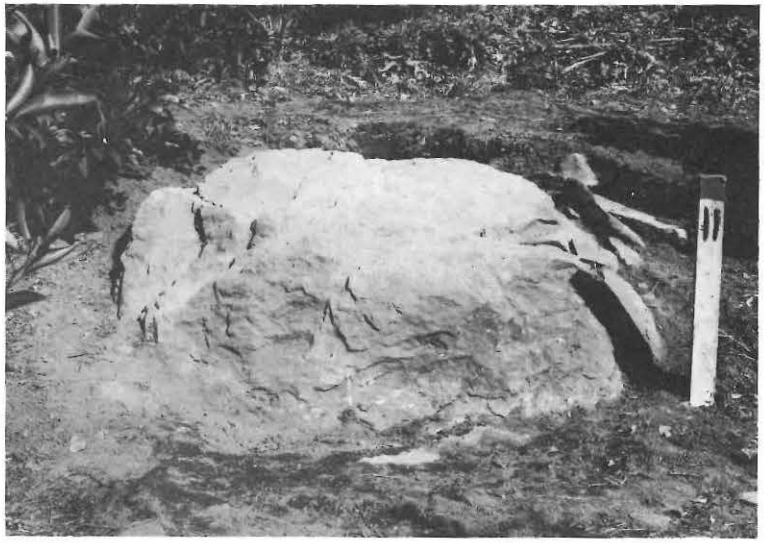


PL 9-2　同・支石

第10号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町硯石1001のイ
地目（現状）		畑地（杉林）
土地所有者		中島正一
撑石	寸法	280×170×28cm
	形状	埋没のため不明（方形に近し）
	石質	玄武岩
	重量	3825.14kg
下部構造	種類	箱式石棺
	支石	不明
特記事項		附近一帯に点在する

第11号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1016
地目（現状）		畑地（密柑畑）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	160×135×50cm
	形状	円形
	石質	玄武岩
	重量	3099.6kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

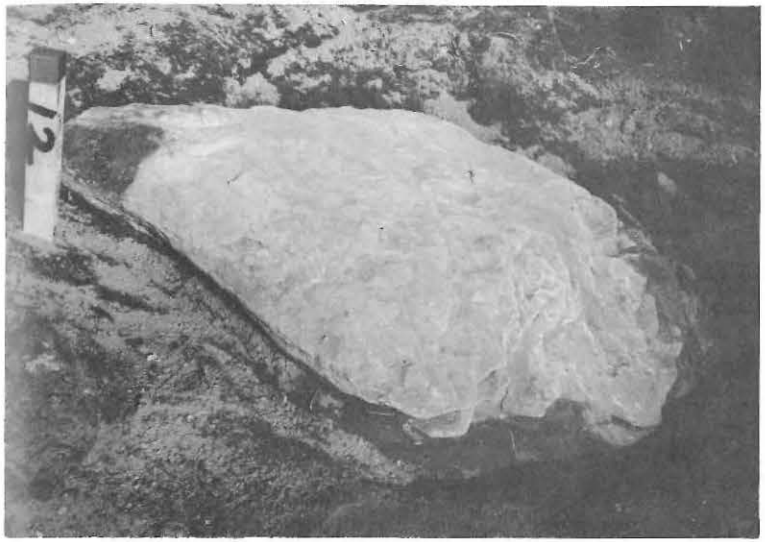
PL10　第10号支石墓



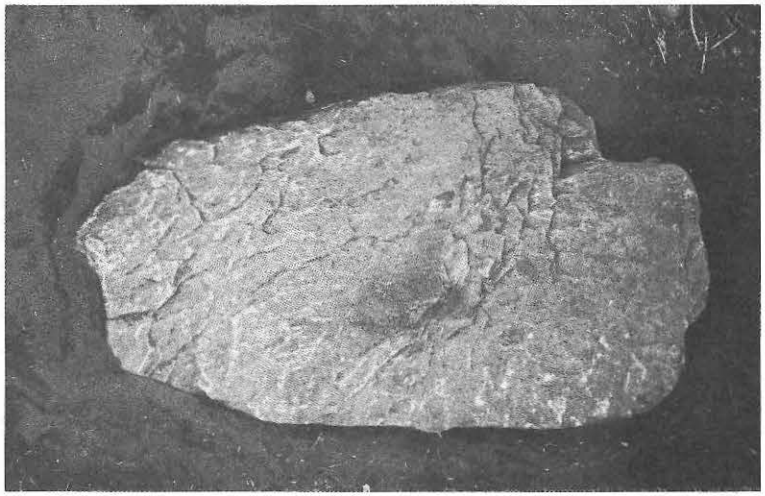
PL11　第11号支石墓

第12号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1016
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	150×140×20cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	1205.4kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

第13号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1016
地目（現状）		畑地（密柑畑）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	200×120×20cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	1377.6kg
下部構造	種類	箱式石棺
	支石	不明



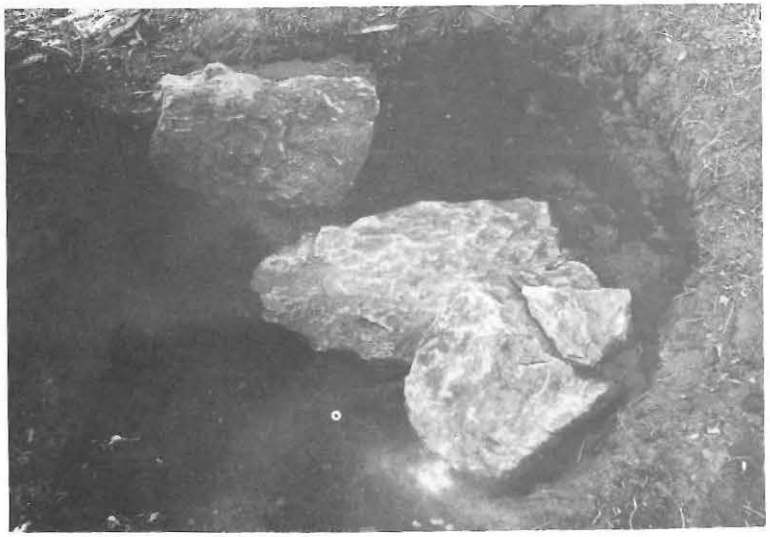
PL12　第12号支石墓



PL13　第13号支石墓

第14号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1016
地目（現状）		畑地（密柑畑）
土地所有者		岸　村夫
下部構造	種類	箱式石棺
特記事項		側板石１枚、棺床(?)のみ残存

第15号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1015第１
地目（現状）		原野（密柑畑）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	200×155×30cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	2224.25kg
下部構造	種類	箱式石棺(?)
	支石	不明
特記事項		S46・2一部調査

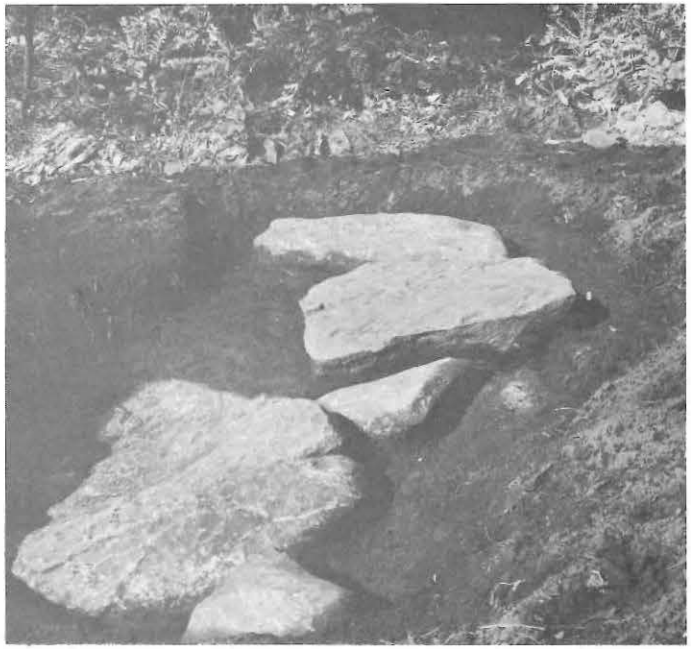


PL14　第14号支石墓

PL15-1　第15号支石墓（昭和45年撮影）

PL15-2　第15号支石墓（昭和50年撮影）

第16号支石墓			
所在地		諫早市破篭井町1016	
地目（現状）		畑地（畑）	
土地所有者		岸　村夫	
撑石	寸法	①110×84×17cm	②106×90×20cm
	形状	①楕円形	②楕円形
	石質	①玄武岩	②玄武岩
	重量	①450.82kg	②547.6kg
下部構造	種類	①不明	②不明
	支石	①不明	②不明



PL16　第16号支石墓

第17号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1001ロ第2
地目（現状）		山林（荒地）
土地所有者		山口鶴雄
撑石	寸法	202.5×140×22cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	1790.02kg
下部構造	種類	箱式石棺
	支石	有（個数不明）

PL17-2　第17号支石墓(左)と第7号支石墓(右)

PL17-1　第17号支石墓(奥)と第7号支石墓(手前)

第18号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町997
地目（現状）		山林（杉林）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	204×183×59cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	6321.43kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

第19号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1003
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		藤田　康
下部構造	種類	箱式石棺

PL18　第18号支石墓

PL19　第19号支石墓

第20号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1003
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		藤田　康
撑石	寸法	180×120×50cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	3099.6kg
下部構造	種類	箱式石棺
	支石	不明

PL.20　第20号支石墓

1　確定的なもの

No	撑石の寸法(cm)	重量(kg)	石　質	下部構造	備　考
1	L W H 125× 125×15	672.66	玄武岩	箱式石棺	
2	160× 90×40	1653.12	〃	〃	
3	210× 160×30	2892.96	〃	土　坑	S50. 発掘
4	推定値 150× 120×20	1033.2	〃	箱式石棺	滅失
5	推定値 200× 150×30	2583.0	〃	〃	撑石だけ消失
6	推定値 130× 100×22	820.82	〃	〃	S45. 確認 S49. 滅失
7	190× 130×35	2481.12	〃	〃	
8	160× 160×20	1469.44	〃	〃	
9	210× 170×43	4405.74	〃	不　明	Hは平均値
10	280× 170×28	3825.14	〃	箱式石棺	〃
11	160× 135×50	3099.6	〃	不　明	Hは推定値
12	150× 140×20	1205.4	〃	〃	
13	200× 120×20	1377.6	〃	箱式石棺	
14	ナ　シ			〃 (?)	
15	200× 155×25	2224.25	玄武岩	不　明	
16	① 110×84×17 ② 106×90×20	450.82 547.6	〃 〃	〃	2個
17	202.5×140×22	1790.02	〃	箱式石棺	
18	204× 183×59	6321.43	〃	不　明	Hは平均値
19	ナ　シ			〃	
20	180× 120×50	3099.6	〃	箱式石棺	

2　不確定なもの

No	撑石の寸法(cm)	重量(kg)	石　質	下部構造	備　考
101	141× 138×20	1116.89	玄武岩	不　明	
102	106× 84×33	843.30	〃	〃	
103	ナ　シ			箱式石棺(?)	
104	95× 78×43	914.47	玄武岩	不　明	
105	110× 68×44	944.57	〃	〃	
106	ナ　シ			箱式石棺(?)	
107	① 162×93×16 ② 172.5×130×22	1329.73 1415.91	玄武岩	不　明	2個
108	ナ　シ			箱式石棺(?)	
109					
110	186× 103×35	1924.42	玄武岩	不　明	メンヒル(?)
111	203× 115×20	1340.00	〃	〃	
112	95× 83×26	588.38	〃	〃	
113	170× 152×80	5932.86	〃	〃	
114	150× 116×50	2496.9	〃	〃	Hは推定値
115	178× 140×36	2574.73	〃	〃	

Fig 6　支石墓集計表

第101号支石墓　風観岳支石墓群の内、第101号～第115号支石墓については支石墓として不確実であるが、語句は従来通りの用語を使用することにする。

風観岳支石墓群B地点の2基（第101号～第102号支石墓）中1基で、風観岳の尾根上の標高約200mの南斜面上に位置している。附近一帯には支石墓撑石大の石材（玄武岩）が多く露頭している。現状は檜林である。

第101号支石墓の撑石は、扁平で駒形の形状を呈している。石質は玄武岩で約1117kgの重量が推定される。支石、及び下部構造は確認出来ず不明である。（PL101）

第102号支石墓　同じくB地点に存在し、第101号支石墓から北へ約30m程離れた標高200mの南斜面上に位置する。現状は檜林である。

撑石は106cm×84cm×33cmの長方形状を呈し、玄武岩で重量は約844kgと推定される。撑石下に拳大の支石と考えられるものを1個確認したが、下部構造についての詳細は不明である。（PL102）

第103号支石墓　風観岳支石墓群A地点に存在する第103号～第115号支石墓についても、B地点と同様な要素を含んでいるので不確実な支石墓として列記する。

第103号支石墓は、風観岳・鞍部の標高約210mの南斜面上に位置している。第3号支石墓から約20m西方にあり、第1·2·3号に隣接している。現在撑石は無く、下部構造は板石状の立石と思われるものを確認した。箱式石棺の可能性も強いが詳細は不明である。（PL103）

第104号支石墓　風観岳の鞍部をはさんで西南方に山陵がある。その標高約215mでなだらかな北斜面上に位置する。第104号と第105号は接するように存在し、その支石墓周辺の畑地より縄文時代晩期の土器片、剥片石器等を多数表採した。雑木林中に支石墓は存在し、他に玄武岩の露頭がみられる。

撑石は、ほぼ方形を呈し、玄武岩で重量約915kgと推定される。支石と思われるものが大小2個確認されたが、下部構造についての詳細は明らかでない。（PL104）

第105号支石墓　第104号と接して存在している。

撑石は、若干傾いているが楕円形状を呈し、玄武岩で重量は約945kgと推定される。下部構造は明らかでなく、支石と思われるものが2個確認されるが詳細は不明である。（PL105）

第106号支石墓　同様に山陵のなだらかな南斜面上に位置し標高約212mである。

この支石墓の撑石は無く、斜めに倒れた状態の板状石が2枚検出されたが、支石墓の下部構造としては疑わしい。（PL106）

第107号支石墓　第106号支石墓と同様の山陵東斜面に位置し、現状は破篭井町有林で雑木が茂っている。

扁平な板状石が2枚重って発見されたが、当初から重ねられずり落ちたのか、それとも人為的、或は自然的要因で結果的にこの状況が生じたのかは現状においては明らかでない。地形的に西から東へ傾斜するが、上下2枚共それと同様な傾きを示している。

下部の撑石は、扁平で駒形の形状を呈し、重量約1330kgと推定される。支石と思われるものは不明であるが、下部構造はボーリングの結果からして箱式石棺の可能性が考えられる。（PL107）

第108号支石墓　風観岳・鞍部のなだらかな標高約204mの北斜面上に位置し、周囲には第4号～10号、17、19、20号支石墓群が集中的に存在する一角に当る。第4・5号支石墓より距離的に約7m位しか離れていない。現状は畑地である。

現在撑石は消失しているが、ボーリングの結果下部構造については箱式石棺の可能性が考えられる。

第109号支石墓　風観岳・鞍部から南西の山陵東斜面上の標高約215 m～205 mにかけてなだらかに傾斜している。その傾斜面には支石墓として確認出来得る様相を示すものが、相当数存在するものと思われる。(確認調査の段階においては時間的な都合により大部分未踏査である。)

第109号支石墓は、この地区全域を含めた総称として付けたものである。(PL 109)

第110号支石墓　風観岳の鞍部にかけての南斜面上に位置し標高約201.5mである。周囲には第11号～15号支石墓が集中している。撑石が立石した状態であるが、メンヒルとしての性格を持つものかどうかは不明である。第2号支石墓の撑石立石状況との関連等を十分考慮する必要性があると考えられる。ただ、この第110号については、立石のすぐ東側に現在側溝が北から南へかけて走っており、側溝掘削の際に人為的に立石状態にした可能性が強く感じられる。しかし、重量にして約2000kg(現表出面で)あると推定されるので相当数の人力が必要と考えられる。

撑石は、五角形状を呈し、立石のすぐ西側で数ヶ所板石と思われるものを確認したが、下部構造としての状況は不明である。(PL 110)

第111号支石墓　風観岳の西斜面上標高約200 mに位置し、北東の方向に縦位置に並んで2基発見された。傾斜面の上側を第111号、下側を第112号支石墓とする。直線距離にして第7号支石墓まで東南へ約180 m、第3号支石墓まで東へ約100 m程離れた地点にある。

撑石は、扁平で三角形状を呈し、玄武岩で重量は約1340kgを推定できる。下部構造については明らかではない。(PL 111)

第112号支石墓　同じく接する様に縦位置に並んだ下側が、第112号支石墓である。

撑石は、第111号に比して小さく、重量も約589 kgと推定され、玄武岩質で方形状を呈している。下部構造については不明である。(PL 112)

第113号支石墓　第111号、112号と同様な地形的位置にあり、それよりも南へ約50m位離れている。現状は檜林で、すぐ横を側溝が北東にかけ走っている。

撑石は、巨石で約80cmの肥厚を持ち、五角形状を呈している。重量は約5933kgと推定され玄武岩質である。下部構造については不明である。

（PL113）

第114号支石墓　風観岳の鞍部を挟んだ南西の山陵で、なだらかに傾斜する北斜面の標高約212mに第114号と第115号支石墓は、近接して位置している。現状は雑木林で、第114号は山道と畑地との境のこんもりした部分に存る。

撑石は、巨石で団子形状を呈し、玄武岩質で重量約2497kgと推定される。下部構造については明らかでない。（PL114）

第115号支石墓　第114号から西へ約7mの近距離にあり、現状は雑木林である。

撑石の形状は三角形で、重量約2575kgと推定される。玄武岩質である。下部構造については明らかでない。（撑石上に乗っている石は後世に乗せられたものである。）

（PL115）

第101号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部481－4
地目（現状）		山林（桧林）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	141×138×20cm
	形状	駒形
	石質	玄武岩
	重量	1116.89kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

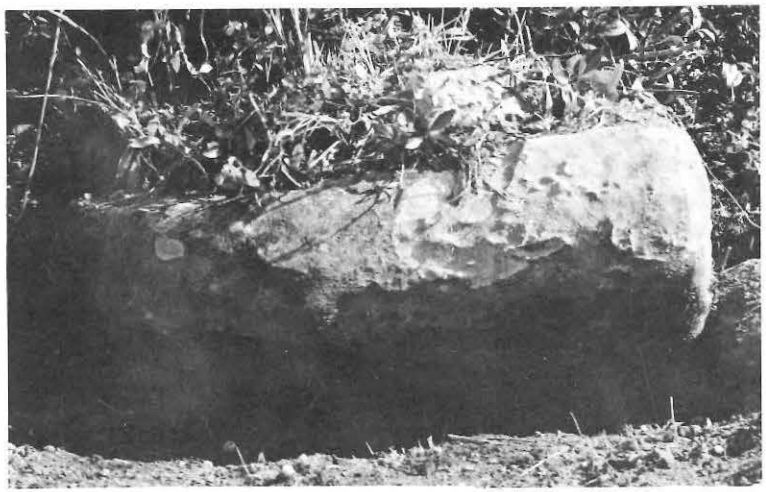
第102号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部481－4
地目（現状）		山林（桧林）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	106×84×33cm
	形状	長方形
	石質	玄武岩
	重量	843.3kg
下部構造	種類	不明
	支石	有（1個）

PL101　第101号支石墓

PL102　第102号支石墓

第103号支石墓		
所在地		諫早市破竜井町1004
地目（現状）		畑地（桧林）
土地所有者		荒木定市
下部構造	種類	箱式石棺(?)

第104号支石墓		
所在地		大村市今村郷字高野1577
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		藤田敏行
撑石	寸法	95×78×43cm
	形状	方形
	石質	玄武岩
	重量	914.47kg
下部構造	種類	不明
	支石	有（2個）



PL.104　第104号支石墓

第105号支石墓		
所在地		大村市今村郷字高野1577
地目（現状）		畑地（畑）
土地所有者		藤田敏行
撑石	寸法	110×68×44cm
	形状	楕円形
	石質	玄武岩
	重量	944.57kg
下部構造	種類	不明
	支石	有（2個）

PL.105　第105号支石墓

第106号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町971
地目（現状）		原野（雑木林）
土地所有者		破篭井町
下部構造	種類	不明
特記事項		板状立石１枚

第107号支石墓			
所在地		諫早市破篭井町971	
地目（現状）		原野（雑木林）	
土地所有者		破篭井町	
撐石	寸法	①162×93×16cm	②172.5×130×22cm
	石質	①玄武岩	②玄武岩
	重量	①1329.73kg	②1415.91kg
下部構造	種類	箱式石棺(?)	

第108号支石墓		
所在地		諫早市破篭井町1002第１
地目（現状）		原野（畑）
土地所有者		藤田秋義
下部構造	種類	箱式石棺(?)

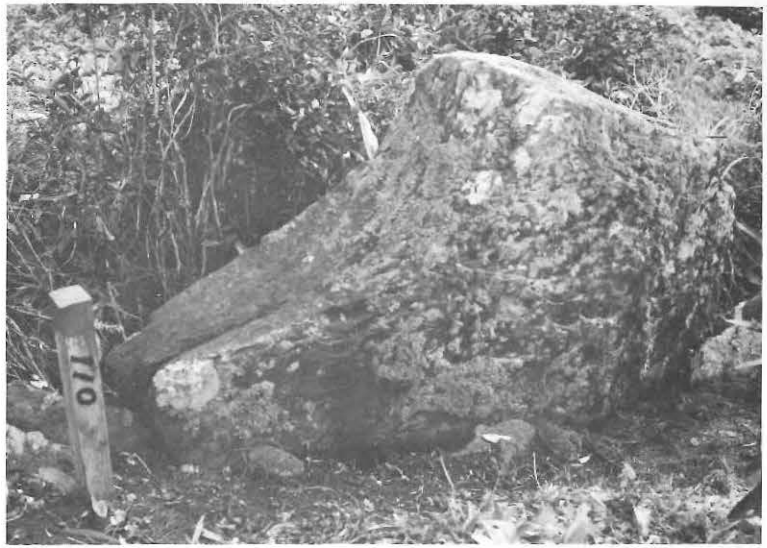
PL106　第106号支石墓

PL107　第107号支石墓

第109号支石墓	
所在地	大村市今村郷字高野1578
地目（現状）	畑地（密柑畑）
土地所有者	富田清二
特記事項	附近一帯に数基群集するようだが未確認

第110号支石墓		
所在地		諫早市破竜井町1016
地目（現状）		畑地（密柑畑）
土地所有者		岸　村夫
撑石	寸法	186×103×35cm
	石質	玄武岩
	重量	1924.42kg
下部構造	種類	不明
特記事項		メンヒル(?)

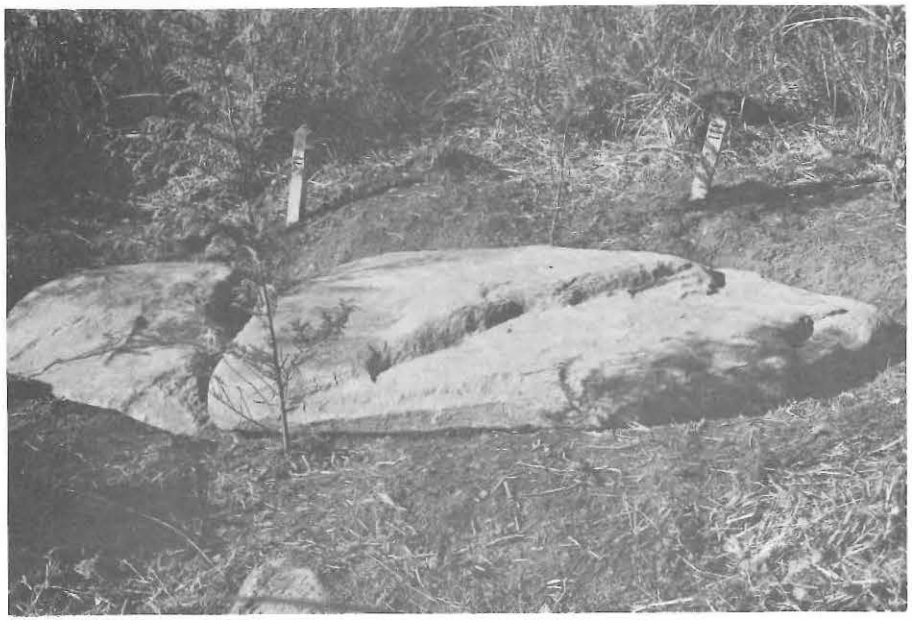
PL109　第109号支石墓



PL110　第110号支石墓

第111号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部491
地目（現状）		畑地（桧林）
土地所有者		藤田秋義
撑石	寸法	203×115×20cm
	形状	三角形
	石質	玄武岩
	重量	1340.0kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

第112号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部491
地目（現状）		畑地（桧林）
土地所有者		藤田秋義
撑石	寸法	95×83×26cm
	形状	方形
	石質	玄武岩
	重量	588.38kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明



PL111　第111号支石墓

PL112　第112号支石墓（手前が112号）

第113号支石墓		
所在地		大村市中里郷千部492
地目（現状）		畑地（桧林）
土地所有者		平原安馬
撑石	寸法	170×152×80cm
	形状	五角形
	石質	玄武岩
	重量	5932.86kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

第114号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部1571
地目（現状）		山林（雑木林）
土地所有者		村崎昭雄
撑石	寸法	150×116×50cm
	形状	団子形
	石質	玄武岩
	重量	2496.9kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

PL113　第113号支石墓

PL114　第114号支石墓

第115号支石墓		
所在地		大村市中里郷字千部1575
地目（現状）		山林（雑木林）
土地所有者		清水　勝
撑石	寸法	178×140×36cm
	形状	三角形
	石質	玄武岩
	重量	2574.73kg
下部構造	種類	不明
	支石	不明

PL115　第115号支石墓

5遺物

①石　器

①は第８号支石墓の土拡内から出土したハリ質安山岩製の剥片で、半分欠損している。

②は第７号支石墓撑石下より出土した玄武岩製の扁平打製石斧で、先端部を残し欠損しているが、その裏面に巾1.5cmで横位置に磨滅した状態が観察され、一種の農耕具としての用途が考えられる。夜臼式の壺形土器と共に採集された。

③～⑪は第104号支石墓周辺で、夜臼式の土器と共に他にも黒耀石製の小形石核、石鏃、剥片等多数採集されている。⑫⑬は第７号支石墓周辺で、同様に夜臼式の土器片と共に採集されている。

⑫は縦長剥片の一側縁に刃こぼれが顕著にみられる　打瘤部を欠損している為、詳細は不明であるが、樋状剥離と思われる剥離が２条入っており、彫器と考えたい。

⑧は掻器で、③～⑪は削器的な機能が考えられる。特に③は一側縁辺に刃こぼれが顕著にみられ、先端部は小かい調整をしている。

⑫は剥片である。以上③～⑫は良質の黒耀石製である。（Fig7、PLⅣ）

更に今後、周辺の踏査が進めば、より明らかになると思われる。

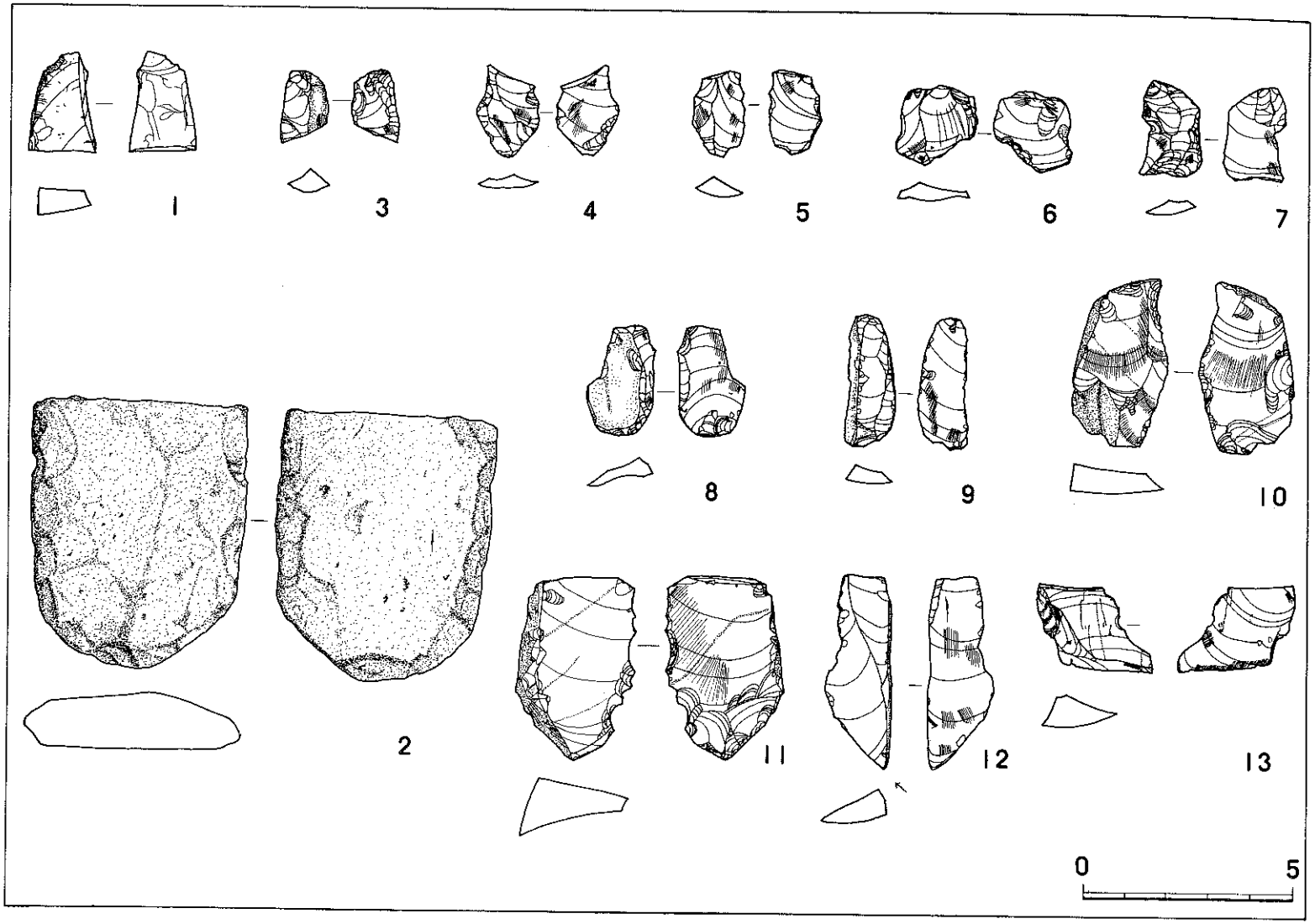


Fig 7　石器実測図

②土　器　今回の調査で出土した副葬品は、図示した若干の供献用壺以外には発見されず、この種の墳墓の特徴をよく示している。

1（Fig８－1、PL Ⅴ－1）は、第7号支石墓下より出土したもので、推定高15cm位の小形壺である。輪積み手法を明確に残している。

直線的な頸部が口縁でやや外反し、胴は頸部との接合部より大きく外に張り出す。外壁はヘラにより研磨調整をされている。

2(Fig８－2、PL Ⅴ－2)は壺頸部である。全面に朱が見られ、外壁のヨコヘラ調整痕が明瞭である。2cm内外の粘土帯で形成する。

3(Fig８－3、PL Ⅴ－3)は壺底部。底部径5cm。色調は淡褐色、胎土に小石英粒と雲母を若干含む。7号支石墓下出土であるが、1とは別個体である。

4(Fig９－4、PL Ⅴ－4)は甕口辺部。口縁下8%に突帯を貼布し、等間隔の深い刻目を上に施す。色調は黒褐色。焼成は良好である。

5(Fig９－5、PL Ⅴ－5)は甕底部。円盤貼付けで、胴部との接合部には、指頭による押圧痕を残す。色調は外壁薄褐色で、一部に焼成時煤を残す。内壁は黄褐色。胎土には良質の粘土を用い、中に若干の石英粒と雲母を含む。外壁は、ハケで薄くヨコナデを行う。

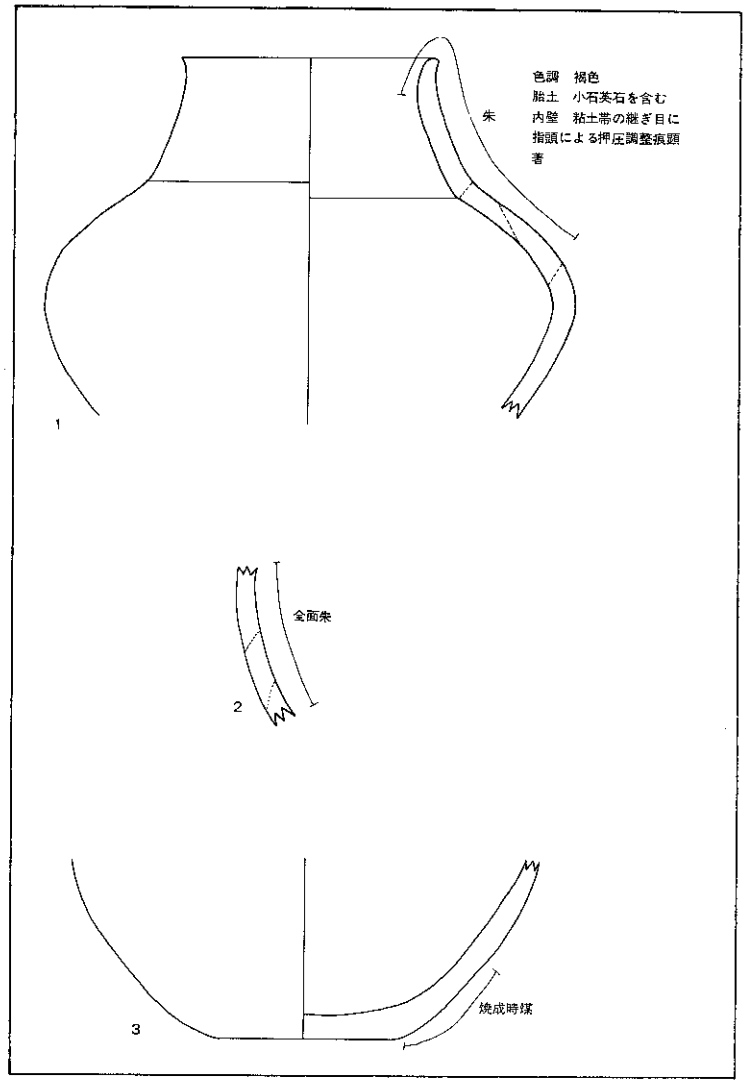


Fig８　土器実測図

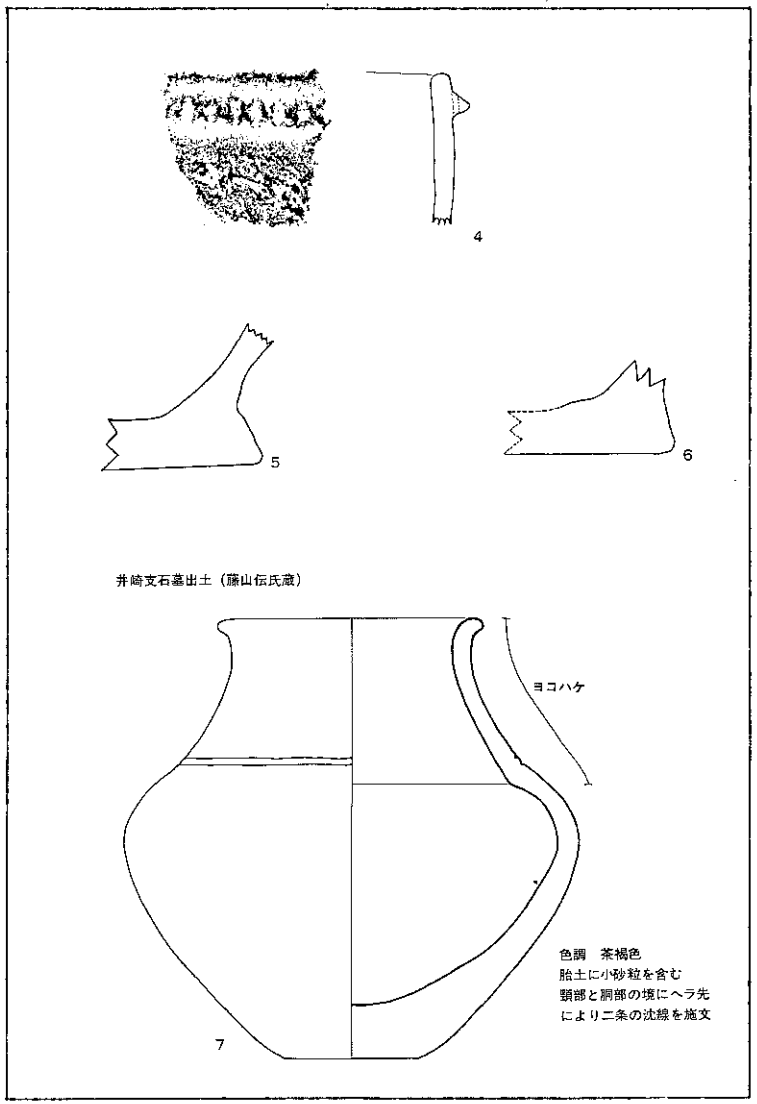


Fig 9　土器実測図

6（Fig 9－6、PL Ⅴ－6）も甕底部である。胎土、色調、成形技法とも5に酷似している。

以上の内、2は9号支石墓下よりの出土であり、4は104号付近、5・6は7号支石墓附近の表採資料である。従って、明確な供献資料は、1・2・3、のみということになる。

土器の時期

以上の土器は所謂夜臼式土器[註1]に比定されるものであろうが、1については、胴部のつよい張り出し、洗練された形状等もあり、合わせて夜臼式土器そのものの定義についても今後の課題としたい。

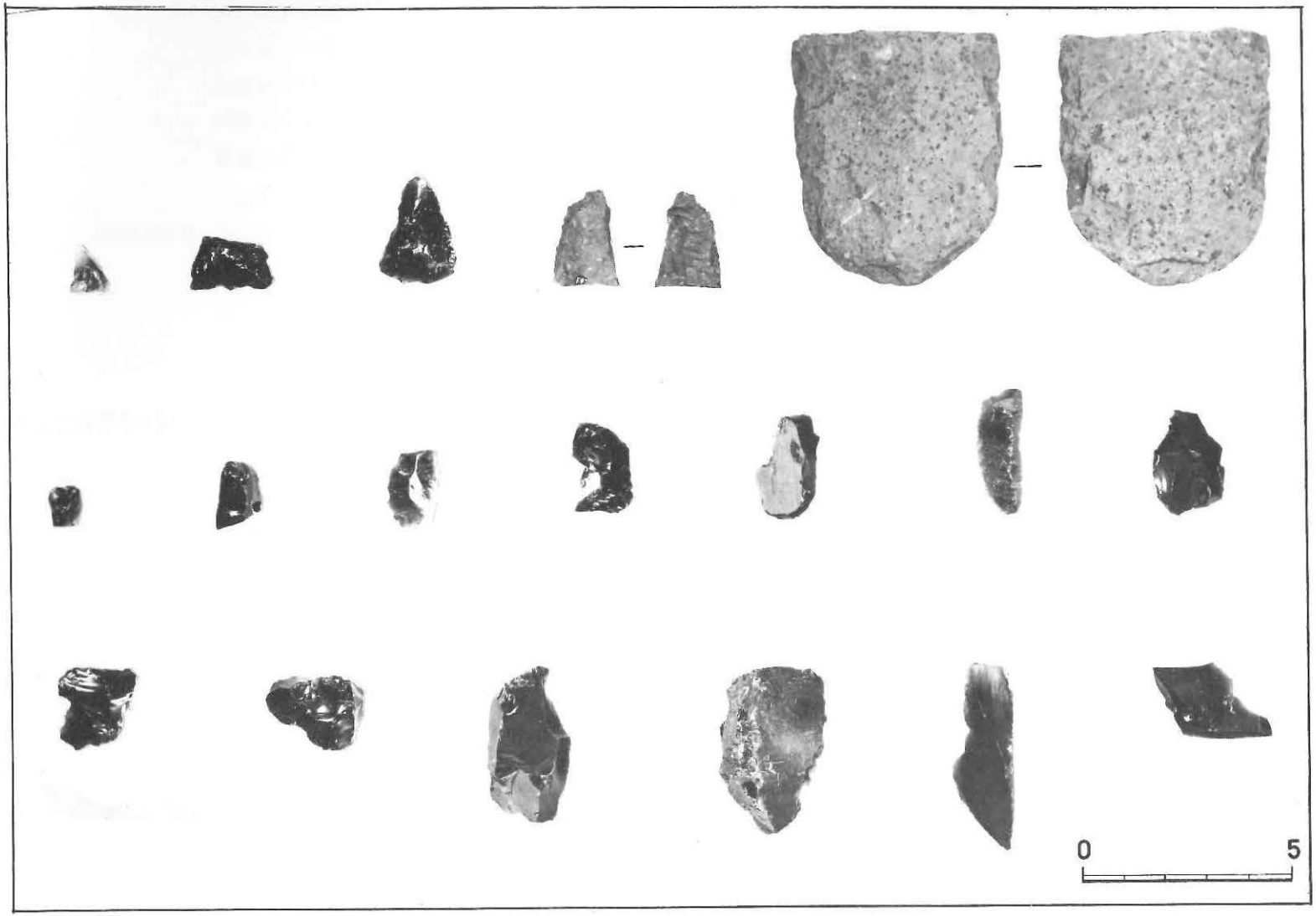
井崎支石墓出土土器

7（Fig 9－7）は長崎県小長井町井崎出土の壺である。昭和8年、鉄道工事に際し、箱式石棺を下部構造とする支石墓内より発見されたと言う。

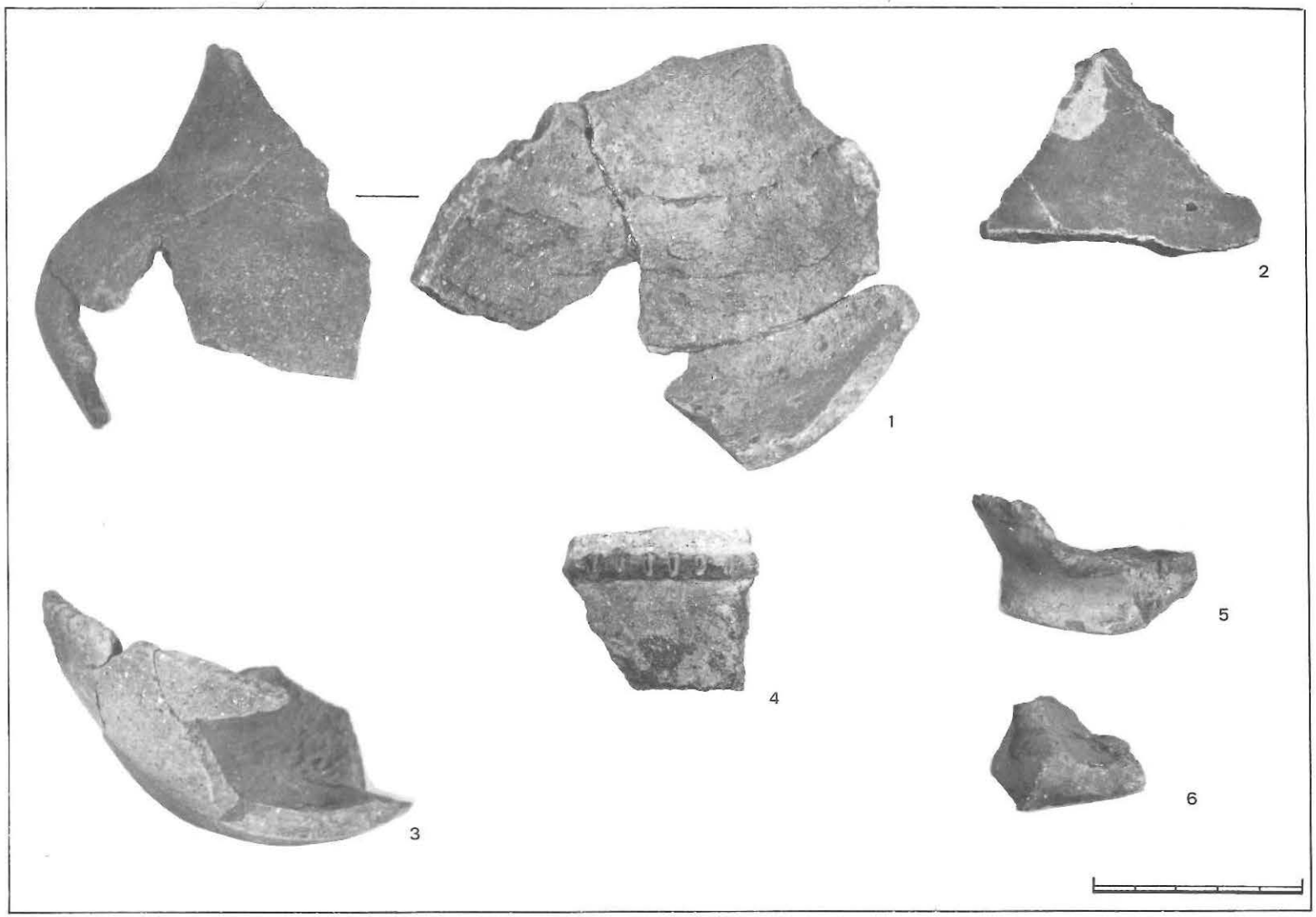
壺はほぼ完形で、高さ11.8cmを計る。底部が厚く、又頸部と胴部の境は内壁に於いて明確な段が見られる。板付Ⅱ式に比定されよう。

註1　夜臼式土器と板付Ⅰ式土器との相違について、高島忠平氏、及び宮崎貴未氏より種々御教示をいただいた。

註2　福岡県甘木市馬田上厚遺跡で1に似た大型壺が合わせ口の下甕として使用された例が報告されている（前川威洋、考古学論叢2　1974）



PL Ⅳ 出土遺物（石器）



PL V　出土遺物（土器）

6 考察

わが国に於ける支石墓が、韓国で言う南方式支石墓第Ⅲ類[註1]に相当する種類のものであるという事は現在では周知の事実であり、そしてこれらの墳墓が、主に西北九州海岸部に分布し、他地域へは十分浸透しなかった事もよく知られている。

今回調査した風観岳支石墓群も、やはり同様な条件を備えているといえよう。

支石墓群の構成

本支石墓群は、確認された結果よりみると現時点ではA、B地点にわかれ、この内A地点は、各々10基前後で3つのグループに分かれるようである[註2]。（Fig2）そして、これらのグループはそれぞれ至近距離で構成され、これら墳墓群の築かれた立地と考え合わせても、明確にこの地が、狭範囲に限定された墓地として利用されたことを示している。

撑石

表Ⅰにある如く、大体径180×160が一般的である。只、風観岳（日野見岳）を中心とする山中一帯には、撑石となる玄武岩が多く露頭し、その選別、運搬[註3]にはさほど苦労は無かったものと思われる。

支石

調査した2基の分については、第3号で4個が認められるが、第8号では認められない。又、箱式石棺を下部構造とする第1号、及び第6号については数個の支石らしきものが見受けられるが詳細は不明である。

大部分の支石墓が通常数個の支石を持つのに対し、このように、支石の無い例も指摘[註4]されており、これらの種のものに、南方式第Ⅰ類、及び第Ⅱ類の分類[註5]がされている。

下部構造

下部構造は、箱式石棺と土坑墓が主であり本遺跡においては、他の種類は含まれていない。

箱式石棺を下部とする場合は、石棺上にまず数枚の板石をのせて蓋石とし、その上に支石を置き、最後に撑石をのせる。（第1号、第6号）　石棺自体は未調査の為、その平面形が明らかでないが、このような形は、唐津市・宇木瀬戸口[註6]・長崎県里田原[註7]・大野台[註8]・狸山[註9]・井崎[註10]・原山[註11]等でよく知られる型式である。

今回調査した、第3号、第8号の2基については土坑であった、（Fig4・PL3、Fig5 PL8）　この場合には、土坑上を覆う一次的な蓋石が見られない。撑石が直接屍体の保護を兼ねているものとも理解し得るが、同時に、且つては木蓋等の存在も考慮に入れる必要もあろう。なお、土坑の形は、第3号は長方形と認められるが、第8号は明確でない。土坑を下部構造とする場合、円形、あるいは長楕円形のものが、一般的であるが[註12]、第3号の場

合、やや特殊ということになる。

封土　封土については、その存在について、且つて幾つかの論評[註13]もあるが、もともと北方式支石墓はもとより、南方式においても、その撑石が下部構造の被護の意と共に、むしろ標式的な存在として理解されている所[註14]からも、埋葬時には、撑石はすでに露頭していたものと思われる。

副葬品　土器の項で述べたように、確実にそれとして認められるのは、撑石下出土の3片の壺形土器のみである。只、7号下で2個分の壺片が発見されているが、7号の横には17号が並列して埋置されており、又7号下北側には後世の溝が走るなど攪乱気味である所から、にわかに2個共7号に属するものとは断定出来ない。なお、遺物の出土状況は、土坑内出土では無く、撑石下よりのものである事も留意する必要がある。副葬品というよりも、埋置後、供献の目的で置かれた可能性の方が強いのではなかろうか。

この他、2本の打製石鏃、1個の篇平打製石斧が見つかっている。福岡県糸島郡志登支石墓群で出土[註15]した、柳葉形磨製石鏃が、韓国に於ける代表的な支石墓副葬品として知られるが、本遺跡では、この種のものは見つかっていない。石鏃は表採資料であり、石斧は7号下出土であるが、前出の如く攪乱の疑いがあり、何れも副葬品として理解するには無理がある。

以上が本支石墓群にみられる特徴である。調査の主体が、あくまで早急な「支石墓の確認」にあり、又、僅か2基の調査で、他の墳墓形態との共伴関係が不明である為、未だ遺跡の実体は不明と言わざるを得ないが、損壊された分を合わせると、少なく共40基以上の規模を持つ墳墓群であった事は間違いない。

風観岳支石墓群の在り方　(59)

この種の墳墓築造が、何如にその石材運搬に有利な地であろうと、到底素朴な皿縁集団による、埋葬に付する観念のみによる所産とは考え難いものがある。そこには、ある程度の経済基盤を持つ、一つの「ムラ」の存在が考えられるだろう。

先に述べた3つのグループは、それぞれ時期的に異なるグループでは無く、時間的には並行しながら築かれた皿縁集団の所産ではないかと考えられる。つまり、最低3世帯以上で構成された「ムラ」の共同作業として築かれたのが、この風観岳支石墓群であったのではなかろうか。

只、所謂、「ムラ」の「長」などが存在し、彼に対して特別な施設等を催けたかは、現時点では判然としない。

本遺跡築造者の生活地

わが国の支石墓が、韓国からの伝搬である事は言うまでもないが、彼の地に於ける支石墓社会が、農耕を生産基盤とする地縁的な共同社会であった事は疑いの無い事実[註17]であろう。

そして、西北九州に於ける晩期農耕論、及び前述した、相当な労力を必要とする墳墓築造等を考え合わせると、直接的な資料には乏しいが、やはり本支石墓群の築造者も、農耕を生活基盤とする生産社会を構成していた事が知られる。

その生活址については、立地的に、この附近は適さず、従って、他に求める必要がある。

昭和49～50年にかけて県教委が調査した、諫早市破竜井町峰ノ原遺跡[註18]において、晩期II式の土器に混って、突帯文土器が数点出土しているが、夜臼期の包含層を見つけるには至っていないし、同期の土器多く出土した、多良見町伊木力川遺跡[註19]についても、河川による攪乱があって、その実体は不明である。

これらの遺跡外には、現在、農耕を前提とする晩期遺跡が附近に見当らず、この点に関しては、今後の資料待ちという事になる。

支石墓渡来の時期

朝鮮半島に於ける支石墓出現の時期は、北方式でBC8世紀、南方式でBC7世紀頃に比定され、その終末は、BC3－2世紀に比定されている[註20]。又、これに対して漢の「楽浪郡設置」という政治的な動向が、支石墓社会を生んだとする説があり[註21]、これらの意見には相当の開きが感じられる。

この点に関しては、断定出来得る資料もないが、いずれにせよ、縄文晩期終末頃、農耕を伴った支石墓社会の人達が断続的にわが国に渡来したことだけは間違いない。この原因を政治的な圧迫に求めるか、又は当時内在した経済的矛盾等による開拓によるものかという問題については、今後の課題となろう。

この渡来の波は、唐津市周辺、及び長崎県北部、及び南部に、あまり時間的な先後関係はなく押し寄せたものと思われる。

この後、唐津市周辺のものは、恵まれた水稲後背地のもとに、在来の縄文人と融合し、弥生文化を生み、順調な発展をみるが、後者は、人口をささえるだけの後背地をもたなかった為、後続する事なく崩壊してしまったものと考えられる。

籾の圧痕のついた土器と出土した事で、直接的な農耕の痕跡を示している原山遺跡が、

何如なる形の農耕を持ち、どのような社会構成であったのか、正式報告書が未刊の現在云々する事は出来ないが、その崩壊に関しては、人口を支えるだけの経済基盤に乏しかったものと思われる。

その後、支石墓は、各地域で、主体を別に持つ墳墓群の中に、特異な存在として知られる例が多くなるが[註22]、支石墓そのものが、弥生期の主要墓制になる事はなかった。他の新しい文物の流入については、積極的に吸収した在来の人達も、葬制に関しては、極めて保守的な観念を棄てきれなかったものと思われる。

風観岳支石墓群は、こうした一連の流の中で、極めて、朝鮮半島のそれと似た形態を有する、「わが国における初期の支石墓群[註23]」である事は論を待たないであろう。

開拓と造園ブームの中、支石墓そのものが失なわれていく中で、未だ、この遺跡は群としての痕跡を残している。その保存については十分な討議と行動が求められる。

註1　金載元、伊武柄、「韓国支石墓研究」1967
2　現時点での結果による
3　鏡山猛　史淵58　1953
4(1)森貞次郎「日本における初期の支石墓」1968
(2)小田富士雄「五島列島の弥生文化」1970
5　註4　同掲書
6　唐津市史
7　長崎県教育委員会、「里田原遺跡展」1975
8　大野台遺跡調査団　「大野台遺跡」1974
9　註4(1)同掲書
10　小長井町誌に掲載される予定。現在未刊
11　松尾禎作　「北九州支石墓の研究」1957
12　註4(1)同掲書
13　註11同掲書　他
14　註1同掲書
15　文化財保護委員会「志登支石墓群」1954
16　将来、更に支石墓数が増加し、更にグループが多くなると、当然この数も多くなる
17　西谷正「朝鮮における金属器の起源問題」史林60－6　1967
18　長崎県教育委員会　「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告」1975
19　多良見町文化財調査報告書第1集「伊木力川遺跡」1974
20　註1同掲書
21　三上次男「満鮮原始墳墓の研究」1962
22　原田大六　「福岡県石ケ崎の支石墓を含む原始墓地」考古学雑誌38－4　1953
大牟田市教育委員会　「羽山台遺跡」1975など
23　註4(1)同掲書

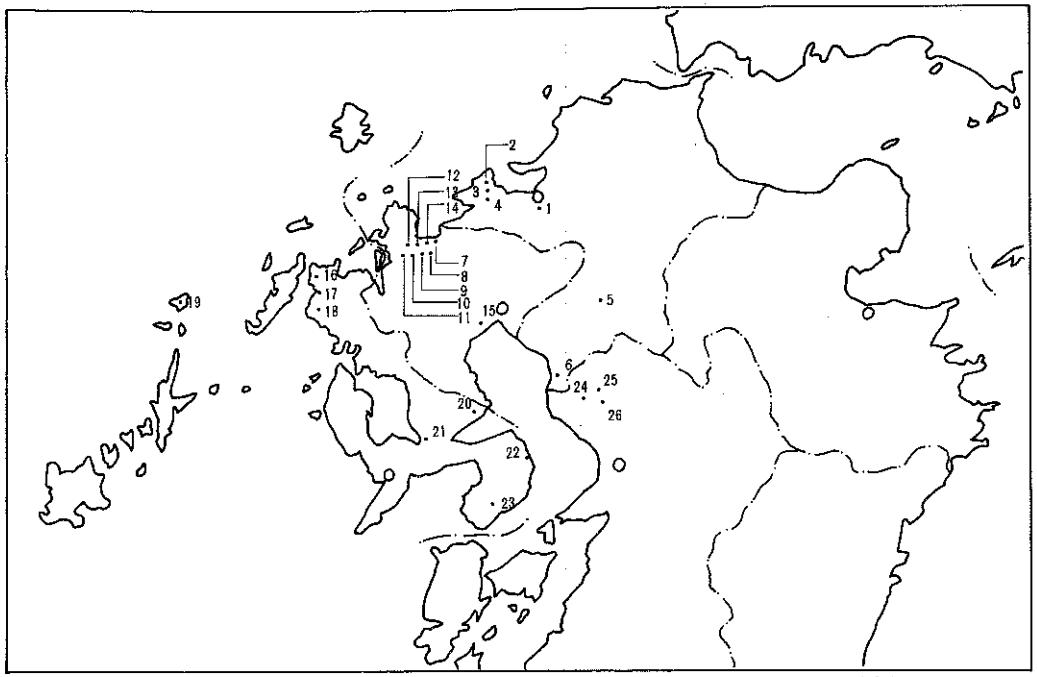


Fig10　西北九州における支石墓分布図

分布図　地名表

1．須玖岡本　福岡県春日市
2．小田　福岡県糸島郡北崎小田
3．志登　福岡県糸島郡前原町志登
4．石ケ崎　福岡県糸島郡前原町石ケ崎
5．朝田　福岡県浮羽郡浮羽町朝田
6．羽山台　福岡県大牟田市大字草木字羽山
7．五反田　佐賀県東松浦郡浜崎玉島町
8．葉山尻　佐賀県唐津市葉山尻
9．宇木瀬戸口　佐賀県唐津市宇木字瀬戸口
10．割石　佐賀県唐津市鏡字柏崎
11．徳須恵　佐賀県東松浦郡北波多徳須恵
12．迫頭　佐賀県唐津市迫頭
13．森田　佐賀県唐津市宇木井手口
14．岸高　佐賀県唐津市半田岸高
15．南小路　佐賀県佐賀市大和町尼寺字南小路（注1）
16．里田原　長崎県北松浦郡田平町里田原
17．大野台　長崎県北松浦郡鹿町町深江免
18．狸山　長崎県北松浦郡佐々町松瀬免
19．松原　長崎県北松浦郡宇久町平郷松原
20．井崎　長崎県北高来郡小長井町井崎
21．風観岳　長崎県諫早市下大渡野町・破竜井町
大村市中里郷
22．景華園　長崎県島原市三会町
23．原山　長崎県北高来郡北有馬町
24．古閑山　熊本県菊池郡旭志町
25．藤尾　熊本県菊池郡旭志町
26．年ノ神　熊本県玉名郡袋明町年ノ神

注1　高島忠平氏の御教示による

風観岳支石墓群調査報告書
諫早市文化財調査報告書　第１集
昭和51年３月31日
諫早市教育委員会　発行
諫早市東小路町１
㈲光文堂印刷　印刷